客員神姫の異世界見聞録

天龍神

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

鳴流神家末妹「鳴流神龍音」はいつも通りに仲間達と平和な日常を過ごしていたのであった。

皆から羨ましがられる体躯以外はごく普通の中学二年生なのだが、龍音のもう一つの顔は異世界をまたにかける武装探偵で元ゲイムギョウ界プラネテューヌ女神候補生である。

※原作名をプリキュアに変更しました

目次

プロローグ
客員神姫 ―― 1
依頼を受けに ―― 4
爪弾く
音楽の街 ―― 7
騒音 ―― 10
三拍子&闇の炎に抱かれて ―― 13
客員と ―― 17
龍が奏でるメロディとリズム ―― 20
不幸の ―― 24
弱さを知れば ―― 27
蒼き音色 ―― 30

セイレーンの罪と罰 ―― 33
黒猫と龍猫 ―― 36
償うための答え ―― 39
トリオ・ザ・マイナーの進撃 ―― 42
心のＢｅａｔ ―― 46
龍音に託せし、異世界の戦士の力の記憶 ―― 50
偉大な戦士の能力 ―― 53
スノーホワイト改めキュアスノーの段 ―― 61
ミューズが ―― 65
ミューズの正体 ―― 68
龍からの新たなる力 ―― 71

アコは龍の協力を断るのか？ ―― 80
約束の日は・・・ ―― 83
客員龍神の次姉 ―― 86
無限の世界 ―― 89
集いし戦士達に現るトリオ・ザ・マイナーの段 ―― 92
異世界の戦士の変身!! ―― 95
異世界の戦士との共闘 ―― 98
暗躍する影 ―― 103
紅き ―― 106
新たなメンバーと不穏な動き ―― 109
解き放たれし封印 ―― 113
白銀の少年騎士 ―― 116
あの曲 ―― 119
ゲイムギョウ界にプリキュア？ 122
巨大スライヌ ―― 126
幻想郷からの ―― 130
超神次元ゲイムギョウ界に一泊するプリキュアの段 ―― 134
前略、 ―― 138
龍音に遭遇 ―― 142
これまでの ―― 145
龍音の性別 ―― 148
ガールズトーク ―― 151
響く七色へ ―― 157

プロローグ
客員神姫

「龍音ちゃ～ん!!」
「何？」
ボクは都立来禅中学に通う背が高いけどこう見えてれっきとした中学二年生なんだけど、知らない人に高校生に間違われるのは日常茶判事なんだよね。
あ!! 名前言うの忘れてた、鳴流神家末妹の鳴流神龍音です。
「龍」の「音」って書いて「リオン」って言うんだよ!!
実はこう見えて、女なんだけど、他の女子達から憧れの対象になることが多いんだよね。
まぁ、実家が武術道場兼喫茶店経営以外は普通かな
「龍音！」
「あ、和真!!」
「アツアツだ～（＼＿＼）!!」
「アツアツ？」

「礼龍。あなたね（´・ω・｀）」
「アンタ達は周りを見なさい」
で、ボクと同じ黒髪で中性的な顔の所為でボクと一緒にいると女の子に見えちゃうけど、れっきとした幼馴染の男の子で名前は神崎和真。
ボクとはある出来事がきっかけで婚約者になったんだ‼
今一緒にいるのは、友達で同窓生の「御子神龍琥・礼龍・姫奈太・志澄琥」で所謂四つ子だよ。
それと、四人と同じく友達で龍琥達のストッパー役の「神無月あづみ」と「神無月あかね」って言うんだけど、あかねは大人しいからボケ担当寄りだからボクかあづみがツッコミ担当してることが多いんだよ。
まだ幼馴染はいるんだけど、噂をすれば、
「龍音ちゃ～ん（≧▽≦）‼」
「天龍ちゃん。同じクラスなんだし」
元気いっぱいで金髪をボクと同じくらいに伸ばしてツインテールに束ねている子は「獅子神天龍」で、ボクとはいつも家が近所ってこともあって一緒にいることが多いんだ。
それでも和真も一緒だけど。

もう一人の茶髪のショートカットのボクより背は少し低いくらいの子が「神楽堂春龍」

ていうんだけど、「春龍」って書いて「ハルト」って読むから、漢字が苦手な人からよく間違えられるらしいんだ。

けど、本人は気に入ってるし。

「龍音は今度の土日はどうするんだ？」

「いつも通りだね」

「龍音ちゃん」

「琴里。奈凰海も一緒なんだ」

赤髪のツインテールでいつもは白のリボンでツインテールに束ねてるけど黒リボンで束ねるとどういう経緯なのか女王様モードになっちゃう「五河琴里」と、ピンクの髪を猫みたいな髪型に整えている子が「神楽堂奈凰海」って子が合流していつものメンバー全員が揃ったところでボク達はある場所へ行くことにしたんだ。

今ちょうど、学校の授業が全て終わって部活が始まってる時間だけど、ボク達全員は部活には入っていないからそのまま下校の準備をして昇降口で靴を履き替えて、ある場所へ行くことにした。

依頼を受けに

現在ボクは、いつも通りに学校から出て、ある場所へ向かっている最中です。
「さてと、行こうか」
「うん‼」
たどり着いた場所は人気のない路地裏でそこでボク達はある物を取り出して壁に向けて、
『認証コード受理‼　ゲートを開きます』
「今日はどんな依頼を受けられるか楽しみだな」
「そうね。折角の借金からおさらばして自由な人生を歩ませてもらうわ‼」
空間が開いてどこかに通じる通路が現れてボク達はそこを進んで行ことにした。
毎日通ってるから慣れてるけど、初めて見る人は驚いちゃうからね（＾＿＿）—☆
ある場所へこの通路を通って行くんだけど、通路は一本道だから迷うことはないんだけど（＾・ω・＾）
そう言っている間に到着した場所こそが、
「お姉ちゃん達はまだみたい」

「高校と中学じゃ授業内容が違うしね」
「うん・・・」
巨大戦艦「フラクシナス」、そうボク達は中学生にして秘密結社「ラタトクス」の特務エージェントなんです。
そして、琴里がこのフラクシナス艦長なんですが、
「あ、綾瀬さん」
「今日は依頼を見に来たんだな」
「はい!!」
「そうか、無茶はするな」
「もう、綾瀬が艦長でいいじゃない?」
金髪の長い髪で前髪に緑色のメッシュが入った誰もが振り返る美貌を持った女性魔法剣士でありながら四大精霊の王なんだけど、間が抜けているから、以前に一緒に旅してた時はど天然な言動が真顔で言うから事態の収拾をするのが大変だけど、自分が悪いと素直に謝る人格者「ミラ=マクスウェル」って言う人なんだけど、ある事情で並行世界の自分がやって来ちゃったから、綾瀬って名乗ってることになって、このフラクシナス艦長代理をしてるんだ。
さてと、ボク達は受ける依頼を選ぶため電光掲示板に向かうことにしたんだ。

「え～と、今日来てる、依頼は？」
「あら！」
「お母さん‼　どうしたの？」
「ちょうど、龍音に仕事を頼みに来たのよ」
「ボクだけ？」
　フラクシナス内に新設された電光掲示板にはいろんな世界からどうしても解決してほしい依頼が寄せられてきてるんだ。
　中には危険な依頼もあるからよく考えて選ばないといけないからね‼
　これまでのボクの経験上だとバトルロワイヤルを終わらせるって言う依頼が一番単独で解決したのが難易度が高った印象あるなって考えていたら、ボクのお姉さんにしか見えないけど、れっきとしたボク達兄妹のお母さんなんだけど、名前が、なぜか、剣客浪漫譚の主人公の名前と一緒で、「剣心」って言うんだ。
　家族の中で二番目に強いんじゃないかな？
　どうやら、ボクだけに依頼を持ってきたみたいだ
　この依頼がとんでもない幕開けとはボク達は知らなかった

爪弾く音楽の街

ボクは今お母さんからお仕事を受けるかどうかを聞かれていた。
そんな決まっている、もちろん、
「やるよ。だって、ボクはそのために次元武偵になったんだから」
「龍音ちゃん」
「そういうところは似るんだから。でも無茶をしないこと。それと、この前の女の子、少しずつだけど、更生して行ってるわよ」
「そうなんだ。それじゃあ、行く準備するね!!」
「待って!!　龍音ちゃん!!」
「奈凰海も馴染んだようね。あの子があのメンバー全員を引っ張る大将としての力量を見させてもらうわね」
いつも通りに承諾しちゃったけど、ボク達にとってとんでもない出会いになるなんて思ってなかった。
そんなことを知る由もなったボクは明日に現場に向かう用意をしに家に帰ったんだ。

そして、
「龍音。流石にこんだけのメンバー全員でいくのは目立つわよ」
「うん・・・」
決行の日になったんだけど、ボク達「流星の絆　白光」のメンバー全員だと目立つちゃうんだった。
ていうことでボクは、
「このメンバーで行くのか」
「そんじゃあ。行こうか!!」
行くメンバーは、和真と天龍とボクと言う完全に幼馴染で構成になっちゃったけど、いつも通りだしね。
和真はこの仕事の際は「キリト」というコードネームで通してるんだ。
なぜって、
「あ、初めまして、オレ、神崎和真って言います」
「君もカズマなのか、オレは剣崎一真だ」
「一文字違いですね」
「でしたら、キリトって呼んでください。ここではそういえば通りますので」
ってことで仮面ライダーブレイドの変身者でボク達にとっては尊敬できる人になる

けど世界と友達の為にジョーカーアンデッドになったらしいけど、当の本人は受け入れてるようで、名前は剣崎一真さんって言う人なんだ。
ボクはインテリジェントデバイスがあるから仮面ライダーになることはないかもしれないけど、一応候補でライダーシステムの変身者も視野に入れてる。
そんな出会いもありながら今の仕事に取り掛かることになったんだ。
ボク達はいつも通りに転送ルームからゲートを通って現場に向かったんだ。
そして、着いた場所は、
「加音町?」
「音楽家が多そうな町だね」
『マスター。どうやらこの街には「プリキュア」と呼ばれる人物がいるようですね』
「プリキュア?」
『はい』
「プリキュアか、どんな人達だろう?」
ボク達が住んでる町より西洋風な建造物が立ち並んでる町ボクも一度来たことのある街でたしか音楽が好きな人達が生活してる場所「加音町」って言う町に来たんだ。
ボクの相棒のインテリジェントデバイス「玄武」がどうやらプリキュアと呼ばれる存在がいるって、ボク達はプリキュアに会うのが楽しみになったんだ。

騒音

龍音は幼馴染である、天龍・和真と一緒に加音町と呼ばれる音楽が盛んな街にやってきたのであった。

今回は仕事つまり簡単に言えばこの街で事件が起きた場合は今いるメンバーで片付けて来いと言うのが今回の仕事なのであった。

次元武装探偵略して「次元武偵」の仕事は大きく分けて、各世界からの依頼をこなしていく場合と龍音達のような現地へ赴いて事件が起きた場合に備える場合と警察などが調査を打ち切った際に遺族などから真相を解明してほしいという場合の三つになることが多いが、それでも犯罪が無くならないのが世の統べなのであった。

龍音達が扱う物には「ガイアメモリ」犯罪なども取り扱っているために非常に危険な仕事をしているのである。

それでも龍音は軽々とこなしているのであった。

「久しぶりだな」

「響ちゃん達元気かな?」

「なんか最近「響」って人多くないか?」

「仕方ないよ。名前が被るのはよくある事じゃない」
幼い頃に加音町に来たことがあるようで龍音と天龍は懐かしそうに街並みを見て歩いていたのであった。
和真は「響」という名前を最近よく聞くので怖がっていたのだが、龍音と天龍は世の中に同じ名前などいくらでもいると話したのであった。
【マスター】
「なに？　この音は？」
「なんだこの雑音‼」
「あそこ‼」
「行くよ‼」
三人「セットアップ‼」
「あの～お願いだよ～女の子になるのはどうにかならない？」
【一応。プリキュアと共闘をする以上は我慢してください‼】
いきなり龍音達を頭を両手で抑えたくなるほどの騒音が襲ったのであった。
ふと、周りを見た龍音は街の人達が意気消沈しているのを見たのである。
自分達だけが拒否反応を示しているということは自分達がその音に耐性があるという意味を示しているのだと推理した龍音はアイコンタクトで二人に合図を送り神姫化

したのであった。
相変わらずの男から女になってしまう変身に慣れていない和真は顔を黒い龍の兜で隠しているのだが完全に飛行島であったノアと同じ声になってしまっているのでインテリジェントデバイス「ソリューション」に何とかならないのかと言うとプリキュアと共闘するのだからという完全ソリューションの趣味全開の回答が飛んできたので和真は呆れてしまったのであった。
そんなこんなで、龍音が薔薇の剣士よろしくの服装に軽鎧「ミネルヴァガード」を装着した状態で現場へと向かったのであった。
変身した三人は騒音の根源を目指すのであった。
これが龍音が騒動に巻き込まれるというとは誰も知る由もなかった。

三拍子&闇の炎に抱かれて

加音町にやってきた龍音達はいきなりの騒音に耳を両手で塞いで怯んでしまったが、アイコンタクトで周りの人達が正気ではないことが災いして自分達の変身を見られてなかったのであった。

一番見られたらまずいのは和真の男から女の子に変身するという完全に痛い人物にされてしまうインテリジェントデバイスに搭載されている人工知能には呆れていたのであった。

「あそこ!!」

「あれは骨のドラゴン?」

「どうやら、スカルドラゴンを召喚したようだな」

「やるんだ（。Д。）」

神姫化した龍音と天龍はいつものコンビネーションで目の前で戦っているピンクのツインテールのプリキュアと金髪のポニーテールで白いコスチュームの二人のプリキュアが骨だけのドラゴンの魔物と戦っている現場に到着した龍音達は数秒で作戦を決行することにしたのだが龍音のいつものあれをすることを一目散に見抜いていた天

龍は引いたのは言うまでもなかったのであった。
「デモンズランス!!」
　プリキュアの二人「えぇぇっぇぇぇ（　。Д。）!!」
「助太刀させてもらう」
「まさか、それって真剣（　☆ω☆）!!」
「メロディー（　、ー゛）ノ!!」
　薔薇の客員兼私服姿に龍の兜を被って顔を隠している龍音が闇の槍を骨だけのドラゴン目掛けて投げて命中させて怯ませたのであった。
　ドスが効いた男言葉で龍音は助太刀することを明かすと愛刀の天下五剣の内の一振りである「童子切安綱」と短刀を抜刀し両腕をクロスした独特の構えを取ったのであった。
　黒いバリアジャケットに軽鎧「ミネルヴァガード」を装備している神姫化している天龍も男言葉で話ながら抜刀し、和真も同じく白と黒の刀を抜刀したのであった。
　それを見たメロディーと呼ばれたピンクのプリキュア龍音達の愛刀に興味津々らしく目が輝いていたので、一緒に金髪の白いプリキュアに注意されてしまったのであった。
「ぐぇぇぇぇぇぇー!!」

「さぁ‼　あいつらもやっつけなさい‼」
「あの猫か」
「ねぇ。驚かないの？」
「驚きたくても、こういった状況には慣れている！　魔神剣‼」
「剣士なら接近戦でやれ‼」
「行くよ‼」
　先ほど龍音の攻撃魔術を受けた骨のドラゴンは態勢を立て直して、側にいた黒猫が喋ったが元より和真以外が猫妖怪の血筋であるためか龍音と天龍は全く驚く気はないのでそれに二人のプリキュアは度肝を抜かれていたのであった。
　龍音は軽く日本刀を振り斬撃を放ち骨のドラゴンを攻撃したのだが、黒猫が接近戦で来いと言い出している隙に、
「決めろ‼」
「翔けめぐれ‼　トーンのリング‼」
「いい気なるな‼　行くぞ‼　浄破滅焼闇‼」
　龍音&メロディ「フィナーレ‼　闇の炎に抱かれて消えろ‼」
「なんか、初めてのわりに、息が合ってるわね・・・（。Д。）」
「あの・・・プリキュアと合体技で「闇属性」は・・・」

「きいいいい‼　覚えてないさい‼　仮面侍とプリキュア‼」

骨のドラゴンをバインドに成功したと同時に龍音はオーバーリミッツＬｖ３を発動し赤い闘気を纏いピンクのツインテールのプリキュア「キュアメロディ」と一緒に息の合ったコンビネーションで骨のドラゴンを倒したのであった。

すると、なんと骨のドラゴンだった物は元の鳥に戻って飛んで行ってしまい、黒猫は悔しそうに捨て台詞を言って立ち去ってしまったのであった。

流石に闇属性を使う技をプリキュアと放つという快挙を成し遂げてしまった神姫化した龍音であった。

客員と

無事に怪物を倒した（？）神姫化してドラゴンヘルムで口元と後ろに麗しい黒紫色の髪を通す穴がいる物を被っている龍音は変身を天龍と和真も同じく素顔を見せないようにしていたのであった。

特に、天龍は姉妹揃って特徴的なアホ毛があるのだ。

「ありがとう。あたし、キュアメロディだよ」

「（響だな、変わってないな～そうだな）わたしは、アスナだ　プリキュアとしての名は持っていない。好きに呼べばいい‼」

「ちょっと‼　メロディ‼　あ‼　わたしはキュアリズムよ」

「（奏でも相変わらずの響ちゃんのお嫁さんやってるね）わたしは、メイル。アスナと同じく、プリキュアとしての名はない」

「（オレは不味いだろ）キリトなのです」

「待って‼」

「行っちゃった・・・というより消えた」

どうやらプリキュアの二人は目の前にいるのが以前遊んだことがある人物であるこ

とに気づいておらず自己紹介をしてきたので、龍音達も仕事上で名乗っている名前を教えて転移したのであった。
　キュアメロディとキュアリズムの二人は目の前にいた三人の人物が一瞬で消えたので驚いてしまったのであった。
「奏、どうしたの？　もしかして」
「響ったら、普通怪しまないの？」
「なんで、あたし達をたすけてくれたじゃない」
「そうなんだけど」
「（あの二人、昔と変わってないね。今度は人間体で会おう）」
　プリキュアの二人は変身を解除して、一人は茶髪で龍音達と同じくボーイッシュな性格の女の子で、もう一人がクリームブロンドの女の子で数年前に会っているが神姫化している龍音と天龍に気づいていないらしく、敵か味方なのかという議論に発展していたを民家の屋根からその様子を龍音達は見て、また会いに来ると呟き立ち去ったのであった。
　それから数日後、
「う～ん」
「どうしたの？　奏」

「この前、どうしてわたし達を助けてくれたのか気になって」
「あの日本刀の‼　そう言えば、なんとなく、あたし、あの太刀筋に見覚えが」
「え？　流石、スポーツ万能な響ね。誰？」

アリア学園に通うこの二人の女の子でキュアメロディこと龍音達ほどではないが運動神経抜群で技術が必要な武道なども熟すが頭脳戦は不得意な茶髪のボーイッシュの北条響と、その幼馴染にして北条響のブレーキ役にして北条響の頼れる相棒キュアリズムこと南野奏の二人は屋上で数日前の戦闘の事を振り返っていたのであった。
確かにあの時、龍音達が駆けつけてこなかったら危なかったのは当然だが、二人は龍音達が神姫化していることに気づいてなかったのであった。
だが響はうろ覚えなのか龍音の剣術の太刀筋に身に覚えがあると言ったのであった。

龍が奏でるメロディとリズム

アリア学園の屋上でお昼休みを取っていた北条響は幼馴染の南野奏に太刀筋に見覚えがあると言ったのであった。

だが、

「キ～ン～コ～ンカ～ンコ～ン～♪」

「話は放課後にしよう」

「そうね」

チャイムが鳴ったので二人は急いで次の授業へ向かったのであった。

数時間後の放課後。

「こんにちは‼　って久しぶりに来たけどほとんど無人なんだよね」

どうやら響達よりも龍音が一足先に加音町にある建物で中にはピアノなどの楽器などを演奏するホールになっている通称「調べの館」と呼ばれる場所で龍音は一声かけて中に入ったがどうやらほとんど無人らしいので、龍音はホールのステージに立ってアイテムパックからある物を取り出したのであった。

それは、バイオリンケースだったのである。

大和撫子を地で行く鳴流神家の面々には似つかないが、こう見えても独学であらゆる洋楽器を演奏する腕前を持っているのである。

それと、龍音が今ケースから取り出したバイオリンは武偵所の報酬で超神次元ゲイムギョウ界のプラネテューヌで一番安いと評判な楽器店で購入した安価なバイオリンだがそれでも龍音には十分なのであった。

そして、

「♪～♪～♪～」

【マスターのバイオリンは初めて聴きますけど、心地いいです】

龍音は慣れた手付きでバイオリンを目を閉じて無心で知ってる曲の中から「ＳＵＰＥＲＮＯＶＡ」を演奏し始めたのであった。

ペンダント型インテリジェントデバイス「玄武」も主のばいおバイオリンの演奏に酔い痴れていたのであった。

これが何も人から教わらずにして独学で覚えたバイオリンの演奏なのかというほどらしいのであった。

「今日もピアノの練習を・・・」

「響ったら、急に立ち止まっ・・・」

「綺麗な音色ニャ～♪」

龍音がバイオリンの演奏をし始めて数分後に私服姿の響達がやってきたのだが、あまりの綺麗な音色を奏でる龍音が演奏するバイオリンに酔い痴れていたのであった。
「パチパチパチパチ　」
「もしかして、龍音なの？」
「うん。正真正銘の鳴流神家　末妹。鳴流神龍音。参上!!」
響＆奏「久しぶり!!」
「久しぶり。響、奏」
龍音がキリがいいところでバイオリンの演奏を辞めると響と奏が思わず拍手をして、久しぶりの親友の再会に響達は驚いたのであった。
龍音が加音町に初めて来たのが遡ること四年前なので、三人は四年ぶりに再会したことになるのであった。
響達と龍音は久しぶりの再会に華を咲かせていたのであった。
「あれから、もう四年も経つのか」
「それにしても、龍音ってバイオリン弾けたんだ」
「弾けるけど、弾き始めたの、一週間前くらいだよ」
響と奏「ウソ～（。д。）！!!」
龍音がバイオリンをケースに片付けて、響がバイオリンを弾ける龍音を褒めたのだ

が、龍音がバイオリンを始めたのは一週間前だと言うと二人は大声で叫んだのであった。

不幸の

　約四年ぶりと言う久しぶりの親友の再会に胸躍らせている龍音と響と奏は喜んでいたのであった。
「あれから四年くらいも経ってるんだよね」
「そうよね。しかし、初めに見た時、龍音って気づかなかったわ。それにしても、龍音って昔から背が高ったけど、今何センチ？」
「１６５㎝かな？」
「中学二年生で１６５㎝って結構高い方だね」
　響と奏は四年前に初めて出会ったあの時の事を覚えてくれていたようでその頃から龍音は二人より身長が頭一つ抜けていたというらしく、今でもそれは変わらないのであった。
　どうやら、二人とも、龍音が数日前助けてくれた龍の兜の侍と同一人物と言うことに気づいてないどころか龍音が女の子であることにも気づいていなかったのであった。
「‼」
「ごめん‼　折角再会したのに、わたしの家のケーキ屋で待ってて‼」

「あ、うん！（さてと、ボクも行かないと）」

再会の余韻に浸っていたのだが、響と奏は何かを察知した可能に突然、アイコンタクトをした後、奏から実家が経営しているケーキ屋で待っていてくれと告げて響と同時に調べの館を出て行ったのであった。

龍音は二人がプリキュアであることは再会した際に感づいていたのであった。

二人が出て行ったを見届けた龍音はアイテムパックにバイオリンケースを締まって、調べの館から外へ出て行ったのであった。

「此処なら、セットアップ‼　さてと、助太刀に向かうとするか」

外に出た龍音はペンダント型インテリジェントデバイス「玄武」を手に持ち、人の気配がないことを確認して、天に掲げて、黒紫が印象に残る東洋の龍を模った兜を被った神姫姿に変身して空を高速で飛んで行ったのであった。

「なんだ？　時計塔にキノコがあるんだ？　考えるのは後だな」

「許せない・・・」

「？」

バリアジャケットで音速飛行で現場の時計塔前に到着した神姫化した龍音は思わず一旦二度見してしまったのであった。

なぜなら、時計塔の前には巨大なキノコが出現しており、そこにはオーケストラらし

き集団がおり、歌い手であろう自分と同じ年頃らしき女の子が舞台に立っていたのであった。

幕が上がりそこに現れた楽譜を見て響と奏の表情が一変して二人が変身アイテムを取り出した瞬間、龍音は時計塔の方を見た瞬間、二人の側にいた白い猫が捕らえられているのを見つけて光速飛行で接近して、

「おまえは‼」

「ふん‼」

「ギャァァっァァ～（。д。）！」

「助けてくれてありがとうニャ‼　あ‼」

「遠慮するな。気軽に喋れ」

見張りであろうよくアニメで出てきそうな三バカトリオを反撃を許すことなく徒手空拳で気絶させて人間の言葉を話す白猫を助け出したのであった。

弱さを知れば

加音町の時計塔前に突如出現した巨大なキノコの舞台では着々と不幸のメロディーと呼ばれる楽曲の準備が進められていたのであった。

「許せない‼」

「あれを見ても・・・」

「ほう？　何を見せてくれるんだ？」

「誰だ⁉」

「ハミィ‼」

「おのれ～‼」

不幸のメロディーを歌わせないためにそれを阻止しようとした響と奏がプリキュアへの変身を試みようとした矢先にメフィストだったが、そこに黒紫の龍の軽鎧に闇夜を醸し出すマントの出で立ちの神姫化した龍音がハミィと呼ばれた猫の妖精を抱えて姿を現したのであった。

「見張りは‼」

「そんなの奴は今頃寝てる」

「・・・」
「ハミィ‼」
「セイレーンが歌って欲しいニャ」
「ハミィ‼　何言ってるの‼」
　メフィストはトリオ・ザ・マイナーを見張りに着けていたことを述べると、龍音は軽くあしらってハミィを下に下ろしたのであった。
　ハミィは信じているのであろう、目の前にいるセイレーンと呼ばれた黒猫に自分がまだ親友であるという意味で歌えと言ったのである。
　その意味を分かっていない奏はハミィに怒ったのであった。
「人は愛すると弱くなる・・・が、恥ずかしがることはない。それは本当の弱さじゃないから。弱さを知っている者だけが、本当に強くなる」
「弱さを知っている者だけが・・・強くなれる・・・」
「セイレーン‼」
　龍音は歩きながらゆっくりと舞台中央に向かいながら人を愛することは弱さではなく、逆に己の弱さを知ることは強くなるということを述べながらセイレーンと呼ばれた黒猫は龍音の言った言葉で心が揺らいでいたのであった。
　親友を取るか、今の地位を取るかという選択を、そして出した答えは、

「不幸のメロディ、スタート！」
「やめさせて‼」
「大丈夫だ」
　そう言っている間にもう既に演奏する準備が整い一斉に演奏を始まってしまったが、セイレーンが答えを自ら導き出したのである。
「セイレーン。おまえを信じなくてよかったよ」
「もういや‼　やめて‼　ハミィを悲しませないで‼」
「え？」
　そう、あれ程敵対していたのにも関わらず不幸のメロディを歌わないという選択をして自分がまだハミィの友であるということを示したのであった。
　自分の思い通りのシナリオに沿って行かない現状に苛立ちを募らせたメフィストは先ほど、セイレーンが叩いた楽譜から飛び散った音符が時計塔に憑依してネガトーンになってしまったのであった。
　龍音は至って余裕の態度を崩さないで愛刀を腰に帯刀していたのであった。

蒼き音色

音符が時計塔に憑依してネガトーンが現れても龍音は動じないで愛刀の鍔に指をかけて鯉口を切って抜刀術の構えを取って余裕の態度を神姫化した状態でいたのであった。

神姫化している龍の仮面を被っているので龍音とは気づいていないがハミィが解放されたので、響と奏は、

響と奏「絶対許さない!!　レッツプレイ!!　プリキュア・モジュレーション!!」

「爪弾くは荒ぶる調べ！　キュアメロディ!!」

「爪弾くはたおやかな調べ!!　キュアリズム!!」

メロディ&リズム「届け!!　三人の組曲!!　スイートプリキュア!!」

「わたしまでメンバーなのか（ ⊠・ω・⊠ ）さぁ、おまえの罪を数えろ!!」

変身するためのモジュレーションを取り出してプリキュアに変身したのであった。

神姫化しているためか、完全にプリキュア扱いになってしまった龍音は呆れながらも、仮面ライダーWの決め台詞と独特のポーズを取ったのであった。

龍音だけはネガトーンの放った黒い矢を、

「ハエが止まるな。空襲剣!!」
「二人でも、手強いのに、あの侍、一人で」
見てから斬り捨てるほどの余裕を見せて的確に捌いて行ったのであるが、プリキュアに変身しても、かなりの苦戦を強いられていたのであった。
「(こんなこと)もう、いやぁぁぁっぁぁぁぁぁぁぁぁ!!」
「え?」
「貴様がプリキュアになることは、薄々感づいていたからな!! 魔神剣!!」
「セイレーン(^ω^)!!」
「今だ・・・!!」
「悪いけど、侍が一人とは誰も言っていないよ。メフィストさん」
セイレーンは目の前の光景に耐えきれなくなったのか思わず叫んだ瞬間に、セイレーンが光に包まれて、水色に近い青い衣裳を身に纏った薄紫色の髪のプリキュアに変身したのであった。
親友がプリキュアに変身したことに大喜びのハミィに気を取られてしまったメロディとリズムは時計塔ネガトーンの攻撃が命中しかけたのであった。
それを斬撃を飛ばして龍音に助けられたメロディとリズムであった。
そこにメフィストが仕掛けようとしたが、神姫化している龍音が黒紫なら、神姫化し

て黒と白のバリアジャケットを身に纏った白竜の仮面を被っている天龍が阻止したのであった。
「思う存分にやってみろ‼　プリキュア‼　ナース‼」
「なんだか、今日は助けられてばかりね」
「けど」
「絶対にあきらめない‼」
神姫化した龍音はいつでもフォローに入れる場所を取り、治癒術で回復させてメロディとリズムに思う存分にやっていいと言ったのであった。
それに闘志を燃やされたのか、メロディとリズムは諦める気はないと答えたのであった。

セイレーンの罪と罰

神姫化した龍音と天龍の助太刀により優位に戦いを進めることになったプリキュアの二人に、黒猫だったセイレーンがプリキュアに変身したことでメフィストは驚きを隠せないまま、龍音から治癒術で回復したメロディとリズムはこの機を逃さないために、

「メイル。おまえも手伝ってやれ（その人は操られてる）」

「勿論!!　よっしゃ!!」

「この前もその光を放ってなかったなニャ？」

「溢れるメロディの、ミラクルセッション!!」

「魔神連牙斬!!」

龍音は天龍を仕事上の「メイル」と呼んでメフィストは自分の意思での行動ではないことに気付いたことを念話で話して、プリキュアに加勢するように言い、天龍はオーバーリミッツＬｖ３を発動したのであった。

メロディも持っていた音撃棒・烈火ではなくベルティエを二本振るい桃色と橙色の炎を飛ばして、それに合わせる形でリズムもベルティエを振るい、フォローに入り、天龍も斬撃を連続で放ってネガトーンをのけ反らせたのであった。

そして、
メロディ＆リズム「三拍子!!　1!!.2!!.3!!　フィナーレ!!」
「負けられない!!　皇凰天翔翼!!」
プリキュアとの合体秘奥義が決まりネガトーンになっていた時計塔は元に戻ったのであった。
音符が元に戻ったのであった。
「だが、伝説の楽譜はこの中にあるからな!!　次こそはおまえらを倒してすべての音符を取り返してやる!!」
「やった!!」
「あれ?　セイレーンは何所ニャ?」
「それに、あの二人もいない」
時計塔ネガトーンを浄化して元の時計塔に戻して喜んでいたメロディとリズムだったがハミィがセイレーンがいないことに気が付いて辺りを見回して見つけたがもう姿が見ないところまで走り去ってしまったのであった。
もちろん、龍音達も姿を晦ましたのであった。
「雨!!」
「急ぎましょ!!」

しばらくすると雨が降ってきたので二人と一匹は急いで退散したのであった。

一方で、

「わたしが・・・プリキュア・・・。」

「どこへ行くの？　風邪ひくよ」

「誰よ‼　どこだっていいじゃない‼　退いて‼」

「そうしたいのは山々なんだけど、ほっとけなくて」

「ほっといて‼」

「許すこと、許されなくても償う心を忘れないこと・・・それは強さ・・・ってある人が教えてくれた言葉」

「許されなくても、償う心が強さ・・・」

自分が犯した罪と自分自身がプリキュアになってしまったことを受け入れられないセイレーンは雨の中一人傘も差さないで佇んでいたところを元の姿に戻った龍音が傘を差しながらもう一本の傘をセイレーンに渡したのであった。

セイレーンは龍音から傘を受け取って走り去ろうとしたが、龍音がそれを良しとしなかったので、償う心があるならばそれは強さだと説いたのであった。

黒猫と龍猫

セイレーンがプリキュアになってから翌日、龍音達も学校が在り、響と奏も同様で、学校で授業を受けていたのであった。

「どうしよう、これから」

セイレーンはプリキュアになった際にペンダントが壊れてしまい、変化出来なくなってしまったのであった。

そう、セイレーンには身寄りがいなく、何処にも帰る場所がないという状態、つまり完全にホームレス状態になっていたのであった。

それから数時間後、

「セイレーンを仲間にするニャ‼」

「そう、簡単に行かないんじゃないかな?」

授業が終わった響と奏はいつものように音符集めに励むことにして、セイレーンをメンバー入りさせることをハミィが提案したのだが、それを響と奏は止めたのであった。

確かに昨日の大騒動の直後の今日で素直に仲間になるとは限らないという二人の意見も正論なので、仕方ないのはわかるのだが、ハミィは、

「待っててニャ‼　セイレーンを連れて来るにゃ！」
ハミィがいつもの単独行動でセイレーンを連れて来ると言って、走り去ってしまったのであった。
二人が止めようとしたが、急に雨が降り出したのであった。
一方で、
「どうしてこんなことに・・・頭にノイズが残ってる」
公園の滑り台の下で雨宿りをし始めたエレンはふと今までの事を振り返って自分が犯した罪を考えていたのであった。
一応、龍音からもらったビニール傘があるのだが、雨脚が早いのと元が猫なのか雨宿りをしていたのであった。
「何してるの？」
突然声をかけられたセイレーンはその方向を見ると、奏の実弟の南野奏太と、その同窓生のアコがいたのである。
セイレーンはふと、奏太を利用して、騒動に巻き込んだことを思い出して、そのまま走り去ってしまったのであった。
「待ってよ～‼　傘、忘れてる‼」
龍音からもらったビニール傘を忘れてしまうくらいに、罪の意識があるセイレーンは

無我夢中で走って行ったのであった。
そのまま、ふらふらと街中を歩ていたセイレーンはある場所へたどり着いたのであった。
そして、
「この音は・・・頭が痛くならない」
そう、その場所は調べの館の前だったのであった。
そこからパイプオルガンとバイオリンの演奏が聞こえて来たのでセイレーンは耳を塞いだが敵対してた際に起きていた頭痛が無くなっていたのであった。
「ねぇ、そんなところにいないでさ、こっち来なよ」
「あなた‼」
「ごめんね、まだ名乗ってなかったね、ボクは、鳴流神龍音。キミとは同窓生になるのかな？」
ついに、龍の末姫と黒の歌姫との本格的な出会いだったのであった。

償うための答え

バイオリンの演奏をしにやってきた龍音と偶然に再会して改めて自己紹介をした龍音に戸惑っていたセイレーンだったのであった。

「楽しむ資格はない!!」

「楽しむも、楽しまないも、セイレーン、いや、エレンと呼んだ方がいいかな?」

「どうして、その名前を?」

「なんとなく、セイレーンのアナグラムじゃないかなって思っただけだよ。それと、この前言ったこと、覚えてる?」

「償う心が強さ」

「おまえさんはその若さで、よくそんなこと言えてしまうんじゃな」

龍音に自分が音楽を楽しむ資格などないと言ったセイレーンに龍音は楽しむも楽しむもと付け加えて、セイレーンの事をエレンと呼んだのである。

セイレーンは昨日会ったばかりの龍音にまさか偽名である「エレン」と呼ばれたことに驚いたのであった。

もう一つの名前を目の前の昨日会ったばかりの人物が知っているという状況に驚か

ないのは無理もない、流石に次元武偵にしていろいろな事件を解決してきた腕を持つとは言えなかった龍音は、ハミィが呼んでいたセイレーンのローマ字表記のアナグラムだと思ったと答えたのであった。

そして、龍音は昨日セイレーンことエレンに言ったことを覚えているかというと、エレンは償う心が強さと呟いたのであった。

調べの館の主である調辺音吉が龍音が歳のわりにすごいことを言ってのけたことに感心していたのであった。

「もう答えは出るはずだよ。こっからは、エレンが気づけるんじゃないかな?」

龍音はバイオリンを片付けて、答えはもう出てるはずだとエレンを後押しする形で言い、エレンはそのまま調べの館を後にしたのであった。

「ボクも行きますね」

「いつでも、来なさい。おまえさんのバイオリンは本当に独学なのかと思うくらいに自由な音色だからな」

「はい」

「鳴り響く流れの神の龍の音の女か・・あの子はとんでもない逸材じゃな」

龍音もバイオリンケースを持って音吉に挨拶をして調べの館を出て行ったのであった。

龍音が出て行ったのを見た音吉は、天の道を行き、総てを司る男のような、名乗り口上を姿が見えなくなった龍音に言ったのであった。
「償う心が強さ・・・」
「セイレ〜ン!!」
調べの館を出たエレンは龍音に言われたことを思い出していたところに、ハミィがエレンの顔面目掛けて飛びついたのであった。
「仲がいいんだね」
「龍音ニャ!!」
「さてと」
後ろから廊下を通過中にアイテムパックにバイオリンケースを締まって出てきた龍音がエレンとハミィを茶化したのであった。
「出て来たらどうかな?　響と奏!!」
「ギクッ!!」
「響!!　奏!!」
龍音に完全に気配を察知されたことに気づいていなかった響と奏は龍音に出てくるように言われて、木陰から出てきたのであった。

トリオ・ザ・マイナーの進撃

　木陰に隠れていた響と奏の気配に気が付いた龍音は出てくるように言って、響と奏は素直に出てきたのである。
「カップケーキ、食べない、折角、龍音もいるんだし、後で天龍も誘ってさ」
「まぁ、いいけど。(!!)」
「どうしたの？　龍音」
「それって手裏剣って言う飛び道具よね？」
「そうよって言っている場合じゃない!!」
　響は一緒に奏の実家が経営している洋菓子店でカップケーキを食べに行こうと誘ってきたので、龍音とエレンは一緒に行くことになったが、龍音が何かの気配に気づき、来ているパーカーのポケットから折紙で出来た手裏剣を放ったのであった。
　手裏剣を初めて見たエレンはあれが手裏剣の使い方と頷いていたので、奏がその通りと言うついでの、ツッコミを入れたのであった。
「痛い～」
「あ、なんだ、三バカトリオか」

「ムキ～＜、へ、＞!!　誰が三バカトリオだって～」
「オペラ風に言われても突っ込んであげないから!!」
「龍音は逃げて!!」
「（別にこの姿でも戦えるけど、しょうがない）わかった」
やはり、昨日の三バカトリオこと、トリオ・ザ・マイナーの三人が木に登っていたのであった。
龍音の放った手裏剣は今日リーダーに就任したバスドラと言う間違えても、どこかのスマホのゲームではない、男の額に命中したらしく、その部分に手裏剣が当たった部分が赤くなっていたのであった。
響と奏は龍音が今の姿でも今の三人がプリキュアに変身した以上の実力を持っていることに気づいていなかったらしく、龍音に逃げるように言って、龍音は言う通りにすることにして、調べの館の人気がない場所へ逃げ込んだのであった。
「逃がしていいのか～まぁいい、出でよ!!　ネガトーン」
響と奏「絶対に許さない!!」
響＆奏「レッツプレイ!!　プリキュア・モジュレーション!!」
バスドラは龍音を逃がしたことが采配ミスだと言って、昇っていた木をネガトーンにして、それを見た響＆奏はプリキュアに変身したのであった。

「行くよ‼　セットアップ‼」
【ＹＥＳ　マスター】
「行くとしようか」
　人気がない調べの館の裏に逃げ込んだ龍音はインテリジェントデバイス「玄武」を掲げて神姫化と同時に変身して、二人の助太刀に向かったのであった。
「何するニャー（　、　ー　）ノ‼」
「ハミィ‼」
「返して欲しければ、マイナーランドに戻って」
「戻って、不幸のメロディーを歌えというわけか？」
「おまえは（。д。）！‼」
「ありがとうニャ‼」
「例え、誰だか知らないけど、アンタが来なくてもわたしは不幸のメロディーを歌う気はないけど」
「そうか」
　メロディ＆リズムが木のネガトーンが伸ばしてきた根っこで身動きが取れない状態に陥っており、ハミィが捕まってしまったのであった。
　トリオ・ザ・マイナーはエレンに不幸のメロディーを歌えばハミィを返すと言い切る

前に、もう既に神姫化している武者姿の龍音に助け出された後だったのであった。

龍音が助け出さなくても、エレンは不幸のメロディーを歌わないと言い張ったのであった。

心のＢｅａｔ

神姫化した黒紫色のマントに龍の紋章が描かれた軽鎧に青紫色の軍服に当たり前のように龍の騎士の兜を被った神姫とかした龍音がトリオ・ザ・マイナーからハミィを依然と同様に救出して、プリキュアに起死回生の機会を作ったのであった。
「形勢逆転だ。どうすると言っても、この木の魔物を片付けるのが先決か」
「くっそ～‼」
「ネガトーン‼」
「スパーン～」
「遅い。貴様はどうする?」
龍音はドスが効いた引く声の状態でしか今の姿では話せないので、周りにいるプリキュアの二人は先ほどの龍音であるということに全く気付いていなかったようで、トリオ・ザ・マイナーのリーダー（笑）のパズル&ドラゴンことパズドラではなくバスドラが木のネガトーンに龍音を襲わせたが、龍音は目にも止まらない速さで伸ばしてきた根っこを斬り捨てたのであった。
「ハミィを傷つけるなら、絶対に許せない‼」

「ラリー来るにゃ！」

龍音に決断を迫られたエレンは、先ほどの人物と同一人物とは気づいていなかったが、戦う意志を決めた瞬間、楽譜に持ちられている♪音記号がエレンから浮かび上がりそして、

「レッツプレイ‼　プリキュア・モジュレーション‼　爪弾くは魂の調べ！　キュアビート‼」

「やれ‼」

「そこの二人、動けるようだな」

「さっきのあなたのおかげよ」

「わたしがこの戦闘で介入できるのは此処までになる」

「動きを止めただと～（ 。Д。）‼」

薄紫色の髪をサイドテールに束ねて水色のコスチュームのプリキュア「キュアビート」に覚醒したエレンを見届けた龍音は、この戦闘で介入できるのはこれ以上はないと言って、木のネガトーンをバインドして動きを封じて、プリキュアに任せることにしたのであった。

キュアビートは音撃弦・烈雷ではなくラブギターロッドと呼ばれる名前が表す通り、ギター状の武器を呼び出し、

「駆け巡れ‼　トーンのリング‼　三拍子　１‼２‼３　フィナーレ‼」
　龍音が使ったバインドのような光の輪が木のネガトーンを拘束して、ラブギターロッドを演奏して、木のネガトーンを浄化して、元の木に戻ったのであった。
「待って‼」
「悪いが、わたしはこれで失礼する」
「ありがとう・・・」
「そうか、近いうちにまた会うだろ」
　ネガトーンが元に戻ったのを見届け鞘に刀を納めて立ち去ろうとした龍音にキュアビートは声をかけて、一言「ありがとう」と言うと、龍音は龍の仮面に隠しているが表情が緩んだが、また、会えると言い残してそのまま、立ち去ったのであった。
「セイレ～ン‼」
「悪いけど、ごめんなさい‼」
「どこ行くにゃ～（　。Д。）‼」
　龍音が立ち去った数秒後、変身を解いたエレンはそのまま猛スピードでどこかへ走り去ってしまったのである。
「エレンちゃん、大丈夫かな～」
「そうね。あの子はきっと立ち直れるはずよ」

その様子を天龍と奈凰海が走り去っていくエレンを見届けていたのであった。

龍音に託せし、異世界の戦士の力の記憶

セイレーンが黒川エレンとなってアリア学園へ転入して来て数日後のとある放課後、いつものように龍音は仕事という名目で、調べの館にやってきていたのであった。

そこには、

「響、コンクール、頑張ってね」

「龍音達も観に来れるなら来てね」

「うん。確か、今度の日曜日だし」

響&奏がピアノの練習をしており、響は今度の日曜日のコンクールに出場することになったのであった。

ふと、龍音はあることに気付いたのであった。

「響のお父さんって確か」

「指揮者だよ」

「なんか聞いちゃいけないこと言っちゃって」

「龍音は気にしなくていいの」

そう響の父は、アリア学園の音楽教師で指揮者と言う顔を持っているのだが、響がピ

アノを一時的にやめるきっかけを作ったことに気づいていない張本人であるため、響は、恐れていたので龍音は謝ったのであった。

響は龍音に気にしないでと言ったのであった。

「それじゃあ、ボクは帰るね」

「うん。龍音、ありがとう」

龍音は今度の日曜日を楽しみにしていると言って調べの館を出て行ったのであった。

響は龍音を見届けた後、今度の日曜日のコンクールは無事に終わらせると誓ったのであった。

「あ、龍音‼　ちょうど、良かった」

「どうしたの？　龍美お姉ちゃん」

「実はこれを渡しに来たんだ」

「ボクに？」

「うん。ウォルターさんが、プリキュアに、もしかしすると、仮面ライダーの力を使えるんじゃないかって、それと、バリアジャケットも、それを一時的に使えるように出来る物なんだって」

「わかったよ（どう見てもスマホ型のケータッチだよね。ご丁寧に随時更新システムまで付いてるし）」

龍音は拠点の戦艦フラクシナスに戻って、自宅に帰ってきたところで姉妹で一番上の姉の龍美からヴェスタＷＳＣ社長のウォルターから龍音に渡すように持ってきたのは、いつも使っているスマホと同じくらいの大きさのタブレット端末で、起動すると、どこぞのＶＲゲーム同様なメニュー画面のスクリーンが空中に現れて、これまで一緒に戦ってきた記憶から創り出されたのであろう、自分達が使っているバリアジャケットや仮面ライダーなどに関する内容の装備も自分だけではなく、他者にも装着可能というサブデバイスだったのであった。

これは、あらゆる世界をまたにかける次元武偵でもしようが許されるのが限られている代物だったのであった。

龍音達自身は今の装備で物足りているので、問題ないが、装備品を購入できないプリキュアなどは手詰まりになってしまうのではないかという天界の判断に基づいてヴェスタＷＳＣに開発を依頼しているのである。

名前は「バトルメモリーデバイス」と何も捻りもない端末を龍音に託されたのであった。

偉大な戦士の能力

バトルメモリーデバイスを託された龍音はそのまま実家へ帰っていたのであった。

龍美は超神次元ゲイムギョウ界のプラネテューヌ教会で生活しているため、超神次元ゲイムギョウ界に帰って行ったのであった。

「バトルメモリーの使える能力を確認しないと（天馬お姉ちゃんも持てるし）」

龍音は自室に文机に向かい龍美から渡されたバトルメモリーデバイスにインストールされている内容を確認することにしたのであった。

いざという時に、使えない能力があるといけないからである。

「ボクのバリアジャケットも使えるみたいだし、ライダーはクウガ～エグゼイドまであるけど、使えるのは、クウガ～鎧武までのライダー達の装備品と能力か、こんだけあれば十分かな」

龍音が託されたバトルメモリーデバイスにインストールされている中で、使える内容はバリアジャケットは龍音達、中学生組だけで、仮面ライダーは随時アップロードされるがクウガ～エグゼイドまでがインストール可能で、他者に渡せるのは鎧武までのライダー達の能力だったのであった。

龍音はバトルメモリーデバイスを授与されたということはこれを用いて導けということではないかということだと思ったのであった。

そして、龍音は就寝したのであった。

バトルメモリーデバイスを授与されて数日後、約束のコンクール当日の日曜日がやってきたのであった。

「龍音、それに、え～と、天龍」

「そうだよ‼　エレンちゃん‼　そうだ、今日はね、龍琥達も来てるんだ」

「エレンちゃん～」

「エレン‼　元気‼」

「ふふふ双子（。д。）！‼　これが双子って奴なのね。音吉さんの本で・・・」

「その本以外で、調べられなかったの・・・？」

コンクールに出場する響を応援にやってきた龍音はいつものメンバーでやってきたのであった。

もちろんのことながら、和真と颯太達もついて来たのであった。

もちろん、エレンは小雪がキュアスノーと言うのは気付かなかったのだが、どうやら調べの館に置いてある音吉の所有物であろう本で「双子」について学んでいたようだが、何か間違えている気がしない天龍だったのであった。

そんなこんなで会場入りをした一行はチケットに指定されいる席へ着いたのであった。

『この気配、来る!!』

「14番、北条響です!!」

龍音達はいつもの直感で席に着き響の順番が回って来たのだが、それとは違う違和感に龍音達は気が付いていたのであった。

そして、響の演奏が終わった瞬間、

「ネガトーン!!」

「きゃ～（ 。 ロ。）!!」

「こうなるんだ（＊， ω， ＊）」

「此処は逃げて!!」

「そうさせてもらうね（いや別にボク達は大丈夫だけど、まだ正体を明かすわけにはいかないからね）」

突如、バイオリンやトランペットのネガトーンが襲撃して、観客から黒いオーラを出現させていたのであった。

龍音達はもちろん、効かないがエレンから逃げるように言われたので、言う通りにして、一目散に会場の外へ避難したのであった。

「行くよ‼　セットアップ‼」
「久々の変身だけど、そうちゃん、ちゃんとしたコスチュームになってる」
「やっぱり、おまえの趣味なのか？　いい加減に男で変身させてくれないか？」
【無理です】
「行くしかないのです‼」
「そうですね。皆さん、いざ‼」
「お～」
　龍音達は言われるがまま、会場の外へ逃げて人の気配がないことを確認して結界を張って、変身したのであった。
　そして、ネガトーンが現れた会場のホールへ転移したのであった。
「はぁっぁぁ‼」
「あの仮面の剣士はいないようですね～」
「プリキュアだけでも厄介ですし」
「裏切り者を始末するついでですしね」
「どうしよう？」
「ミューズが来る偶然を狙うのは分が悪いわね」
　どうやら、二体のネガトーン相手に苦戦していた三人にトリオ・ザ・マイナーは高笑

いしていたのであった。
　だが、それがフラグを建ててしまうことに気が付いていなかったのである。
「楽しそうだな、わたし達も入れてもらおうか？」
「その声は‼」
「どうする～‼」
「今日はわたし達も一緒だ‼」
「助っ人参上って感じね」
「今思うと、この子達は誰なのよ？」
　そう、如何にもグッドタイミングでホールのドアが開き、プリキュアとネガトーンの間に割って入った龍音に和服風のコスチュームに如何にも漫画の忍者よろしくと言わんばかりな鉢金と白い覆面と言う格好の神姫化した志澄琥とサングラスのようなバイザーの龍琥に、ビキニアーマーと言う完全に人前では恥ずかしい格好から龍音と同じタイプの胸元だけの黒色の軽鎧（アイアンガード）に男物の服装に背中にはバスターソードで仮面ライダー龍騎のような鉄仮面と言う神姫化している颯太達が姿を現したのであった。
「さてと、一体は引き受けてやる。ちょうどいい、おまえ達で、これを試させてもらうか」
《ＨＩＢＩＫＩ　ＩＢＵＫＩ　ＴＯＤＯＲＯＫＩ》

「うわ‼」
「これはいったい」
「何か嫌な予感が」
「なんだか、やれる気がする」
「礼は後にしろ」
　龍音達が一体を引き受けることになり、龍音はバトルメモリーデバイスを起動させて空中にタッチパネル式のスクリーンを映し出して、響鬼・威吹鬼・轟鬼をタッチした瞬間に、メロディが炎に包まれ、リズムが竜巻に、ビートに雷が落ちたのであった。
　なんと、メロディのコスチュームが紫色に変わり赤い手甲装備され、ベルティエが音撃棒・烈火に変わって、リズムも青色にコスチュームが変化して、ベルティエが音撃管・烈風に変化して、ビートはラブギターロッドが音撃弦・烈雷に変わったのであった。
「これって」
「わたしが尊敬している偉大なる戦士達の物だ。それは清めの音で魔化魍を倒す響鬼、仮面ライダー響鬼のメンバーの装備だ」
「あたしと同じ名前の仮面ライダーがいるの（。д。）！‼」
「今のうちにやってしまいなさい‼」
　メロディ＆リズム＆ビート「やられるもんですか‼」

「終わりました」
「早（。д。）！」
　まさか自分達のコスチュームが仮面ライダーと同等になるとは思ってなかったようで、メロディ達は戦いながら驚くのだが、龍音はそんなトランペットのネガトーンを見ないで圧倒して、志澄琥の二刀で止めを刺して元のトランペットに戻っていたのだが、それが合流して一秒以内で倒していたのだから仕方ないのである。
　そして、
　メロディ＆リズム「これでも喰らえ‼」
「心のビートは止められない‼」
「覚えてろ～‼」
「来なくていいから」
「待って、ありがとう・・・」
　メロディの火炎連打の型・リズムの疾風一閃・ビートの雷電激震が決まり、バイオリンのネガトーンを元に戻して、元のコスチュームに戻って、トリオ・ザ・マイナーは逃げて行ったのであった。
　それを見届けると、龍音達は足早にホールから出ようとしたので、メロディが呼び止めてお礼を言って、龍音達は無言でホールを出て行ったのであった。

ネガトーンを倒したことで破壊してしまった個所は元に戻り、何事もなかったかようにホールに戻ってきた龍音達はそのままコンクールを観賞したのであった。

スノーホワイト改めキュアスノーの段

　エレンがキュアビートに変身して木のネガトーンを倒したまでは良かったが、そのまま、走り去ってから数日が経とうとしていたのであった。
「さてと、小雪の初仕事だよ」
「うん」
「ボクがフォローに入るからリラックスしてね」
「ありがとう」
　今日から一緒にメンバー入りをすることになった、以前の魔法少女となった者達によるライダーバトルならぬ魔法少女バトルに巻き込まれたが龍音に助け出されたがそれに引き換えに魔法少女に変身できなくなってしまったのだが、プロトプリキュアと言うことでスノーホワイトに変身できることになった姫河小雪と天龍と龍音は加音町が見渡せる丘から今日の仕事に向かう場所を小雪に教えていたのであった。
　そして、
「来たよ!!」
「セットアップ!!」

ネガトーンの気配を察知した龍音達は一斉にバリアジャケット装着と神姫化を済ませて、現場へ急行したのであった。
「みんな、悲しんでる」
「これがあの人形部隊の仕業だ」
「その通りだ（まさかと思うが、あの三人がこの街に来てるのか？）」
現場へ向かっていると、加音町には悲しみのオーラを出している住民たちが居り、それに気付いたスノーホワイトはプリキュアの相手にしている存在の仕業と理解したのであった。
殺し合いに巻き込まれた所為なのか、こういった騒動に巻き込まれても多少驚くことがあるが、動じないようになっている自分がいることにスノーホワイトは内心では悩んでいたのであった。
「あいつ‼」
「このままだと、メロディ達が危ない‼　最悪、死ぬ‼」
「わたしは、いつでも回復できる準備を‼」
現場に到着した龍音達はプリキュアに変身している響達がネガトーンになった人形部隊を元に戻したところで、メフィストが音符を吸収して自らをパワーアップしてネガトーンと同様になったのであった。

それを見た龍音達は一瞬で、メロディ達が危ないと察知して、スノーホワイトは回復の準備に入り、
「うぉおおおおおおお!!」
「うわぁぁっぁぁ!!」
メフィストがどこぞの少年漫画よろしくの光弾を連射してきたのであった。
キュアビートのバリアも簡単に突破されてしまった瞬間にメロディ達は悲鳴を上げてしまったが、
「いつ見ても、貴様らは（*，ω，*）」
「全くだ」
「アスナ!!　メイル!!」
「あなたは？」
「え～と（プリキュア扱いになるから）ひらひら降り積もる粉雪!!　キュアスノーホワイト!!」
「ホワイトは外した方がいいわよ」
「じゃあ、キュアスノー」
「え～い!!　また貴様らか!!」
「メフィスト」

ベルカ式らしき魔法陣の防御壁がメフィストの光弾を防いで、神姫化した龍音と天龍が立っていたのであった。

三人の横に、スノーホワイトが立っており、名前を聞かれたので、即興で「キュアスノーホワイト」と名乗ったが、リズムからホワイトは取った方がいいと言われたので、キュアスノーに改名したのであった。

「此処は六人バージョンで行くか?」

「そうね」

全員「さぁ、おまえ（あなた）の罪を数えろ（なさい）‼」

ミューズが

ネガトーンと化したメフィストに向けて仮面ライダーWの決めポーズを六人で決めたのであった。
「えええ～い!!　そんなもんは数えてられん!!」
「ったく、最近の大人はどうもキレやすいらしい」
「ネガトーンになっているということは浄化すれば元に戻る」
「わかったわ!!」
「こい!!　プリキュアども!!」
普通なら返すことはないが、まさかメフィストが返してきたので、薄らと笑みを浮かべて、愛刀を抜き、構えて、プリキュアと共闘することにしたのであった。
『そういえば、能力だけ引き出せたよな』
『そうだ。それはわたし達が普段使っている能力をプリキュアにも使わせる』
『使ってみるか?』
龍音と天龍はネガトーンと化したメフィストより強い存在と刃を交えたこともあり、高速飛行しながら念話で話ながらバトルメモリーデバイスを使ってみることを天龍に

提案して、使うことにしたのであった。
　次元武偵のインテリジェントデバイスはすべてアップロードされて、「ＣＬＯＣＫＵＰ」なども使えるようになっているがプリキュアには特殊な条件がない限り強化装備などは貰えないので、所有者の判断で使用可能であるので、龍音は迷うことなく、あのアイコンをタップしたのであった。
《ＫＡＢＵＴＯ　ＧＡＴＴＫＵ　ＨＥＲＡＣＵＬＥＳ》
「今度はカブトムシ（。д。）！」
「わたしだけクワガタ？」
「ヘラクレスオオカブトね」
「姿が変わろうと、掛って来い‼」
「遠慮なく」
　メロディは頭に日本のカブトムシと同じ角を催した赤いティアラが装備されて、両手足には銀色の籠手などが装着されて、ライダーベルトにカブトゼクターが取り付けてあるマスクドフォームではなく、コスチュームがライダーフォームを意識した感じになったのであった。
　リズムがヘラクレスオオカブトのような銀の角のティアラが装備されて、ヘラクレスオオカブトのような角のような装甲が右肩に着けられて右手首にライダーブレスが装

着された状態で、メロディと同じくベルティエをカブトクナイガンに変形してたのであった。

ビートは両肩にガタックダブルカリバーがどうやらラブギターロッドが変化したらしく、頭にはクワガタの顎の形をした髪飾りを付けた姿になったのであった。

メフィストが余裕をかましているが、言っておこう、今プリキュアを含めてスノー以外がクロックアップが可能であることに気付かないでいたのであった。

龍音達は遠慮なく、龍音と天龍は念話で、プリキュアはベルトのプッシュ型のスクラップスイッチに手をかけた瞬間だった。

「ミューズ!!」

「(なるほど、やっぱり、わたしの読みは当たってたか)」

紫の仮面のプリキュアのミューズがメフィストの前に立ったのであった。

ミューズの正体

神姫化した龍音がバトルメモリーデバイスをタップして仮面ライダーのカテゴリーから選択してタップしてプリキュアの三人に装備を転送した瞬間、仮面のプリキュアのミューズが立ちはだかったのであった。

そして、そのまま龍音が転送した装備品が元のコスチュームに戻ってしまったのであった。

龍音と天龍も鞘に刀を納めたのであった。

「チッ!!」

「集まれ、音符達よ!!　礼を言うぞ!!　おまえのおかげで全て奪い去ることが出来た。これで不幸のメロディは完成する」

「させない!!」

「待て!!　そこをどけ!!」

「退いてくれ!!」

ミューズが乱入したことで集めていた音符が奪われてしまいメフィストが哄笑した後、龍音と天龍が縮地を使ったがミューズの相棒のドドリーに邪魔されて鞘から抜刀し

ようとしたところでメフィストが転移してしまったのであった。
「守りたいものがメフィストなの？」
「どうやら、図星の様だな」
「待って‼」
「速い‼」
「此処は任せろ‼　スノーは回復を」
「うん」
「あなた、珍しいわね、回復魔法が出来るなんて」
「分け合って、アスナちゃんに助けられて」
　メロディ達がミューズに守りたいものがメフィストなのかと問うと図星だったようで、無言で走り去ってしまったので、縮地で先回りできる龍音と天龍が後を追うことにして、先ほどの戦いで負った傷をスノーに回復させるように言い、ミューズを追って行ったのであった。
　メロディ達はプリキュアで回復能力を持っているスノーに驚いたが、これは元はと言えば魔法少女バトルに巻き込まれて、ある仮面ライダーの如く「戦わなければ生き残れない」と言う現状に置かれて龍音の乱入によって魔法少女バトルは終わりを告げたが、多くの人が亡くなったのである。

ある仮面ライダーは管理者が放棄したことで終わりを告げることでライダー達が蘇ったが、スノーが巻き込まれた魔法少女バトルはもう二度と蘇らない現実を叩きつけられたのだが、それを愛想笑いで表に出さないようにメロディ達と話すスノーは回復させて痛のであった。

「ここまで・・・」

「鬼ごっこは」

「終わった?」

「‼」

「やはり、その靴で背丈を誤魔化してたか、キュアミューズ、いや、調辺アコ」

「ウソでしょう（。д。）！‼」

「こういった相手には手慣れてるからな」

仮面のプリキュアのミューズが辿りついた場所は何と調べの館だったのだ。

そして、先回りしていた龍音と天龍が神姫化したままで姿を見せて、そこにいたのは、龍音の姪「夏龍」と「冬龍」そして天龍の姪「ヴィヴィオ」と同い年である調辺アコだったのであった。

龍からの新たなる力

キュアミューズが調辺音吉の孫娘でメジャーランドの姫であり9歳の調辺アコであることにとっくに気づいていた龍音は約束をしていたのだが、どうも腑に落ちなかったのであった。

「ねぇ、龍音叔母さん‼」

「アコに会ったんだろ？」

「うん、何か引っかかる。まさか‼」

「アコちゃん達だけでメフィスト、つまり」

「元に戻そうとしてるんじゃない‼」

「行こう‼　ありがとう、冬龍‼」

「おう‼」

現在龍音は超神次元ゲイムギョウ界の元プラネテューヌ教会の自室で情報を整理して推理していたのだが、そこの調辺アコと同窓生だが、身長は一回り高い双子で歳は近いのだが姪っ子で銀髪右碧左翠が妹の冬龍でもう一人の菫色の髪に右金左紅が姉の夏龍と親友のヴィヴィオが部屋に入ってきたのであった。

夏龍はいつもの男口調で、アコに会っているらしく、それを聞いた龍音は推理していた事柄をまとめた瞬間、引っかかていた何かが外れたようで、龍音は椅子から立ち上がり棚に掛けかけていた愛刀を取り粒子化して、約束の日ではないのだが龍音は行くきっかけを作ってくれた姪っ子達に礼を言って加音町へ向かったのであった。

「わたし達も行く？」

「行こうぜ‼」

【ちょっと‼　行くんですか‼】

「ルビー行くよ‼」

「サファイアも‼」

【行きましょう‼】

残された冬龍達も突然隕石の如く落下してきた意思を持ち自称魔法の杖である「ルビー」と「サファイア」ともに友を呪縛から解き放つべく龍音を追うように加音町に向かったのであった。

もちろん、龍音に気づかれないようにであるが。

「(冬龍達ったら、ついてきちゃったんだ)」

『ねぇ、完全に気づかれてるよね』

『仕方ないだろ』

『うん』

龍音は冬龍達が気配を消して尾行してきていることはお見通しだったが、敢てそのことは見逃すことにして、急いで、

「龍音、珍しいね、深くは聞かないけど」

「待ってよ‼　龍音ちゃん‼」

「待ってくれ、オレを置いて行くなよ‼」

「加音町に転移開始‼」

次元武偵の拠点にして、精霊との平和的解決をモットーにしている宇宙戦艦「フラクシナス」の転送ルームに設けられている次元装置で加音町まで転移することにしたのであった。

そこに、龍音のことに気が付いたいつものメンバーがやってきたので、一緒に加音町に転移することになったので、装置を龍音が起動させて加音町に転移していったのであった。

「この感じ、メフィストが‼」

「今度ばかりは、元に戻してやるのです‼」

「そうだね」

「もう‼　なんで変身速いの（。д。）！‼」

加音町に到着して早々に何かを感じ取った龍音達は変身したのだが、小雪だけが変身していなかったのであった。
急いで街へ急いだのであった。
そして、加音町の街中で、
「チッ‼　遅かったか」
「その声は、アスナ」
「ふん、おまえらはこの間の？　以前のオレではない‼」
もう既に響達がプリキュアに変身してメフィストと戦いを繰り広げていたのであった。
龍音は仮面の下で悪態をついたが、すぐさま、戦闘に介入することにしたのであった。
「チェンジ‼　プリキュア‼」
「え、嘘（。д。）！」
「ひらひら降り積もる粉雪‼　キュアスノー‼」
遅れて到着した小雪も返信用の元は自分のスマホなのだがそれを取り出して、画面をタップして、光に包まれて、そして、以前、回復魔法で傷を治してくれたキュアスノーに変身したので、メロディ達は驚いていたのであった。
それも仕方ない、自分達と同じ地球人である小雪がパートナーの妖精から力を貰わず

にプリキュアに変身してしまったのだから。
「分けは‼　後で‼」
「面白い、こんだけのプリキュアが此処に出揃うとは」
「言っておくが、わたし達は「プリキュア」ではないがな。ん？（これは‼）」
「ほう？　どうやら、また能力が現れたか？」
「なら、出し惜しみはしない方がよさそうだな‼　（ごめん（m゛・ω・゛）m　ゴメン…　響達‼）」
《ガングニール　アガートラーム　天羽々斬　デュランダル》
「これ何（。д。）！‼　アスナ（。д。）！‼」
「シンフォギアなのです‼」
「シンフォギアってなに‼　かっこいいからいいや‼」
リズム達「メロディ（☒・ω・☒）」
スノー以外はプリキュアではないのだが今のメフィストにはそんなことは関係ない、その時、龍音の持つバトルメモリーデバイスが反応して、空中にスクリーンを表示して確認した龍音は薄らと笑みを浮かべたのであった。
メフィストはそれを見て、面白がっていたのである。
そして、龍音が高らかと宣言した瞬間、手慣れた手付きでスクリーンを操作して、タッ

プしていくと、聖遺物との適合率がなければ纏うことが出来ない鎧「シンフォギア」をなんと、メロディ達が身に纏ってしまったのであった。

メロディはなぜか黒いガングニールの為、ピンクから黒の鎧に黒いマントに槍型の武装で困惑したが、待ち前の性格で気に入ったようで、それを見たリズム達は呆れてしまったのであった。

リズムはアガートラームを身に纏っているがメロディ同様に流石にボディラインが出るようなことにはなっておらずプリキュアのコスチュームと一体化していた状態である。

左腕の籠手から短刀をとりだしたのだが、無意識で行っているのであった。

もちろんほかの二人も同じで、ビートが風鳴翼の天羽々斬を、ミューズが立花響のガングニールになんと、

「これは剣ね。けど、今は使わないけど」

「ねぇ!!　ビート!!　刀と槍交換して!!」

「そんなこと言ってる場合か!!」

「さぁ、来い!!　プリキュアども!!」

本来なら強力過ぎてシンフォギア奏者三人掛りだったデュランダルを軽々とミューズが背負えるくらいの長さでミューズが暴走するどころか問題なく立っており、ビート

は風鳴翼の天羽々斬を纏って刀を構えていたのであった。
　メロディはどうやら槍よりか剣がいいらしいのだが、そんなことを言っている場合ではないので、
「え～い!!」
「はぁぁぁ!!　体が軽い!!」
「やるしかない!!」
「そうね!!」
「こざかしい!!」
「どうやら、おまえ達の出番はないようだな？　出て来い!!」
『ギクッ!!』
「悪いけど、ここからは!!」
「わかった」
「(アコ・・・)」
　スポーツ万能のメロディは始とは思えない槍裁きでメフィストが放つ光弾を切り裂き、それに合わせるように日本刀型武装でビートが斬り捨て、短刀でネガトーンを攻撃するリズムに素手のままのミューズと言う構成になっていたのであった。
　龍音は仲間と共に周りに被害が出ないように生み出されたネガトーンの群れを各個

斬り捨てながら、プリキュアたちの補助をしていたのであった。
もちろん、物陰から飛び出すタイミングを伺っている姪っ子達に出番はないと言うと、飛び出し損ねた冬龍達だったのであった。
そして、アコが実父の目の前に立ち、少し屈み、攻撃の体勢に入ったのであった。
それを、ネガトーンに攻撃を繰り出しながら横目で見ていた龍音達は手出し無用と言っているのだろう、龍音達はそう言っているのだと感じていたのであった。
「その剣で、オレとやるか？」
「パパ‼　元の優しいパパに戻って‼」
「ぐぉおおお‼」
「・・・・」
ついに父と対面したミューズはゆっくりと背負っている金色の装飾の両刃剣「デュランダル」に手をかけるしぐさを取って、メフィスト目掛けて突撃したのであった。
そして、見事、ミューズの剣ではなく拳が叩き込まれたのであった。
するとメフィストがプリキュアの浄化の力に悲鳴を上げて光に包まれ出したのであった。
「う、何をしていたのだ？」
「パパ‼」

「アコ‼　どうやら、アコを悲しませてしまった。許してくれ。それにしても、その姿は」
「しいて言えば、スイートプリキュア「シンフォギアフォーム」と言えばいいだろ」
　メフィストは元の姿に戻れたようでネガトーンに侵食されて犯した罪を償うことを決意して、新たな力を手に入れた愛娘達と和解したのであった。
「アスナ、（m゛・ω・、）m　ゴメン…」
「謝るな。こっちが勝手にやったことだ。それではな、約束の日に」
「うん」
　自分達が窮地に陥ってしまったことを神姫化している龍音に謝っているメロディ達に龍音は気にするなと言って仲間達共に元の世界へと帰還したのであった。

アコは龍の協力を断るのか?

仮面のプリキュアのミューズの正体がまさかの小学生の調辺アコだったのであった。
龍音と天龍が神姫化している状態のままで先回りしていたことに驚くしかなかった黄色のコスチュームになっている調辺アコは背筋に悪寒が走ったのであった。
「メフィストが貴様の父なのではないのか?」
「あんた達に関係ない‼　あんた達に‼」
「助けたくないか?　家族を?」
「何言ってるの‼　あんた達みたいな得体の知れない奴に」
「まぁ、いいさ、いずれ一緒に戦うことになることは違わないがな」
「待ちなさいよ‼　そっちが名乗らないのは‼」
調べの館の祭壇前で神姫化した龍音から助けたくないのかと問われたアコは頑なに神姫化した龍音の協力を拒んだのであった。
これ以上の無理強いは良くないので龍音と天龍はこのまま出て行こうとしたら、アコから名前くらい名乗って行けと言うので、二人は名乗ることにしたのであった。
「アスナ、武偵だ」

「同じく、武偵のメイルだ」
「それが名前なの‼　いいわ‼」
「近いうちにまた会おう‼」
「何よ、あいつ、けど、頼もしいわね」
龍音と天龍は本名を名乗る訳にはいかないので、仕事で使っている名前を名乗り、調べの館を出て行ったのであった。
それを見届けたアコは扉が閉まったのを確認して、二人が診ていないことを良いことに、本当は一緒に戦えることがうれしいことを述べていたのであった。
「(アコ、聞かれていることに気づいていないだね)」
「(いいじゃない、帰ろう)」
龍音と天龍は誰もいないことを確認して元の姿に戻り自分達のことを嬉しそうに述べているアコを盗み聞きして、その足で帰路の就いたのであった。
それから数日が過ぎたのであった。
「お姉ちゃん達は別のプリキュアの応援だし、ボクがやらないと‼」
「行くよ‼」
「ああ」
姉達が別の場所へ行ったりとしているため、龍音は限られた仲間達でなんとか今回の

任務を別の仕事をしながら熟していたのであった。

　遡ること三日前、

「もう!!　やめて!!　パパ!!」

「パパってことは」

「ミューズは」

「娘・・・」

「ミューズの正体は・・・」

『やっと、その気になったか』

『まぁ、仕方ないな』

　メフィストとまたも戦うことになってしまったメロディ達に、龍音はペアを組んでいる颯太が神姫化した女竜騎士状態で助太刀に入っていたところに、紫色の仮面のプリキュアのミューズが自身の声でメフィストが父である事を暴露して、止めに来たのである。

　だが、そのままメフィストはそのまま姿を晦ましてしまったので、メロディ達に龍音は時間が必要と言って今になったのであった。

　そして、約束の日になったのでまた加音町へ向かったのであった。

約束の日は・・・

約束の日になったので、龍音はいつものメンバーで加音町に到着したのであった。
加音町に到着したまでは良かったのだが、
「龍音!!　早く!!」
「響!!　ちょっと!!」
「響姉ちゃん!!　龍音兄ちゃん困ってるだろ!!」
「あ!!　そうだった」
「要するに、コスプレすればいいんだよね。調べの館で着替えて来るから待ってて」
「自前の衣裳を持ってるのね（ ☒・ω・☒ ）」
「まぁ、とりあえず、オレ達も着替えに行くか」
なぜか、海賊風の衣裳を身に纏った響がやって来て、それに続くように魔道士の奏に、姫なので西洋のお姫様の格好のアコ、それと黒猫のエレン、カップケーキの被り物のハミィがやってきたので、察しがついた龍音は呆れてしまったのであった。
最後にドラキュラの奏太と言うメンツであった。
態々、響達が約束の日を提案してきたことに。

言われるがまま、龍音達は調べの館でコスプレ衣裳に着替えることにしたのであった。
「やっぱりこれがいいかな」
「そうだね。龍音ちゃんにはぴったりだし」
「うん」
「まさか、わたしも巻き込まれるとはね」
「後で、土道さん来るんだし」
調べの館で音吉にコスプレ衣裳に着替えるためと言う訳を話すと納得してくれたので、案内された部屋でアイテムパックに念のために入れていた勇龍達が作ってくれたコスプレ衣裳を取り出したのであった。
で結局、龍音は流石に響達が自分を男だと思っているためか、閃光の剣士の衣裳は不味いと思い、アドリビトム組のリオン・マグナスと同じ格好に落ち着いたのであった。
天龍は髪型はいつものツインテールに束ねたまま、超神次元ゲイムギョウ界で生活していたので露出している服を着るのに抵抗が無いが流石にそれは不味いので、露出が少ない侍姿の衣裳になったのであった。
二人とも愛刀は不味いので、コスプレ用の模造刀を帯刀することにしたのであった。
一緒に来たメンバーは各々の衣裳を着ていたのであった。

着替え終わったので会場へ向かったのであった。
「あ、来た来た!!」
「どうかな?」
「龍音兄ちゃん、カッコイイな」
「刀持参の時点で誰かを思い出すんだけど」
「そうかな?」
「響が日本刀を持ったら猫侍だよ（。ㅂ。）！!!」
「うん」
会場へ向かう道中で響達と合流したのであった。
コスプレ衣裳に身を包んだ龍音達を見た響達の目には眩しいらしく、そこにアコが感づいている発言をしたが、奏太の発言に遮られたのであった。
そんなこんなでハロウィンの会場へ向かったのであった。

龍琥達は以前の魔導士ではなくくノ一と侍の衣裳で、和真は剣の物語の主人公の服で、颯太は西洋の軍服姿で、小雪は龍琥から借りた魔導士のコスプレ衣裳で会場に向かったのであった。

客員龍神の次姉

加音町に次姉こと紫龍天神と言う異名を持つ鳴流神龍姫達より一足先にやってきた龍音達だったが、まさか町総出で、ハロウィンイベントを開催しているとは思ってなかったらしく、仕方なく、龍音達は用意周到なのか、前もって半ば強引に持たされていたコスプレ衣裳を着て待ち合わせ場所へやってきたのであった。

「お待たせ」

「流石、何着せても似合う男は違うわね（^ ―― ）―☆」

「姉ちゃん、龍音兄ちゃんなんだし」

「あんたが、その衣装来てると、どこかの剣士ね」

「ま、いいじゃない!!」

「なんで、剣士系ばっかりなの?」

「言われても・・・（流石に、武偵にして、この前の剣士って言えないからね）」

合流した龍音達のコスプレ衣裳を見た響達は目を輝かせていたのであった。

特に龍音の軍服にマントに日本刀型摸造刀と言う姿を見て南野奏の実弟の吸血鬼のコスプレをしている奏太は憧れの眼差しを向けていたのであった。

それ以外はどこかで見覚えがあると言った感じで見ていたのだが、響は全くその雰囲気に気づいていなかったのであった。

そんなこんなでハロウィンイベントを楽しむことにしたのであった。

「タツキー!!　この街は、イベントをしているのか？」

「そうだよ、だから、今日は誘ったんだよ!!」

「動きづらい!!」

「リタ、楽しみましょうね（^ ―― ）―☆」

「別に、この街の祭りごとが楽しみじゃなくて、エステルが心配でついて来ただけなんだから!!」

「そう言いながら、ノリノリに白猫のコスプレ衣裳に着替えたのはなんで」

どうやら、この加音町のハロウィンイベントを楽しむべくやってきたのは、麗しき鮮やかな腰まで伸ばしている黒髪をポニーテールに束ね、普段は黒を基調にしたパーカーなどのボーイッシュな格好でいることが多いが今は加音町のハロウィンイベントの仮装の為に、本来なら胸元が露出している衣装なのだが、敢てそれを失くしてある白いラインの入ったスリットが入っている黒いドレスにそれと同じ、長手袋に愛刀は白と青なのだが、コスプレ用の白い摸造刀を帯刀している少女にして、龍音の次姉にしてフラクシナス並びに異世界各地では英雄若しくは本名を文字って「戦場をかき乱す猫の龍姫

（りゅうひめ）」と評される若干１６歳でその称号を手に入れている鳴流神龍姫が仲間と共に加音町のハロウィンイベントにやってきたのであった。

この出会いが、後に、プリキュア達の運命を変えるかもしれないことに今だ加音町にやってきたメンバーは知る由もなかったのであった。

無限の世界

加音町のハロウィンイベントを楽しむことになった龍音は仲間と姉である龍姫を含む一行共にイベントに参加していたところに、遅れてある人物達がやってきたのであった。

「わたしも来なくてはならなかったのか？」

「いいじゃない」

「あ、天夏さん達だ」

「龍音の知り合いなの？　初めまして、龍音の女友達の北条響です」

「同じく、龍音の友達の南野奏です。こっちが弟の奏太です」

「「ソウタ」が二人もいるんだ。ボクは、龍姫さんの仕事先でバイトしてる、朝宮弥生だよ」

「妹の紗季だ。後に姉さんがやって来るはずだ」

「龍音の従兄の天河天夏だ」

龍音からすると年上の後輩になるのだが、基本そんなことを気にする秘密結社内に属する次元武偵チーム「インフィニット・ワールド」のメンバーが各々に仮装してやって

きたのであった。
　紗季は魔法職には向いていないという判断からか、龍音とは色違いの西洋の赤い軍服でやってきたのであった。
　もちろん、
「スミレ姉ちゃんとは双子なのか？」
「コラ‼　すいません‼」
「別にお気になさらないでください。スミレとは従妹ですわ。それよりも、奏太君、奥方がいるのにも関わらずほかの女性に声をかけるのはどうかと思いますよ」
「そうなんだ。イテッ‼（＞＿＜）　アコ～（。д。）！」
「あれが「夫婦」なのか？」
「ラウラ、それは違うと思うよ」
　並行世界の自分達である「織斑一夏」を除くメンバーも一緒に加音町のハロウィンイベントを楽しむためについて来たのであった。
　ラウラはなぎさと星奈の娘感覚で扱われたり、奏太が自覚がないのかアドリビトム組のロイド・アーヴィング並みのフラグを建築し始めていたので、それをなぜかどこで知ったのか、キュアホワイトのコスチュームで仮装してやってきたので、響達が驚いていたが、注意したところで、密かに思いを寄せるお姫様コスで仮装しているがれっきと

した正真正銘の異世界の姫なのだが、奏太の耳たぶを掴んでそのまま引きずって行ったので

あった。

ちなみにスミレは青を基調とした可愛らしい、

「可愛いメイド服なんですね」

「これは、姉さんに無理矢理・・・」

「何言っているのです‼　スミレもノリノリで着たではないですの‼　それに、姉妹でお揃いですねってうれしがっていたのはスミレですわよ‼」

「趣味がコスプレだもんね（^ ―｜）―☆」

「それは言わないで（＞＿＜）‼」

「物凄いギャップがあるですね（ ⊠・ω・⊠ ）」

恥ずかしそうに偽尻尾に猫耳カチューシャまで装着して半年だが姉であるアンナもピンクのメイド服をコスプレ衣裳として着て、ヨーロッパ組に茶化されていたのであった。

「」

集いし戦士達に現るトリオ・ザ・マイナーの段

加音町のハロウィンイベントを楽しむために仲間達が勢ぞろいしていたのであった。
「アコと奏太は大丈夫かしら?」
「多分、ヴィヴィオ達と合流して「修羅場」になってたりして」
「小学生で、それ経験したらまずいだろ」
「何ですか?その状況」
奏太に密かに思いを褪せている姫様コスを着ているアコの二人が心配している奏に、勇龍辺りが製作したのであろう明らか場違いな日本軍の軍服のコスプレ衣裳を着ている弥生が笑顔でヴィヴィオ達まで巻き込んでアコのドロ沼状態になっているだろうと言ったので、軽装の戦士風のコスプレ衣裳を着ている天夏はツッコミを入れたのであった。
天馬と瑛夏はお揃いで猫耳に巫女服に日本刀と言う西洋文化に似つかないコスプレ衣裳を着ている状態で、恋人で幼馴染にして見た目が女の子にしか見えないがれっきとした男であるコスプレではなく完全に、
「理輝さん、響が男に見えるほど美しいですね」

「これでも男だよ‼」
「男の人がミニスカートって、なんで周りの人たち気づいていないくらいすごい（ ⊠・ω・⊠ ）」
　ミニスカートの巫女服と言う下手すれば女装癖の持ち主扱いしかねない状態で、両脇を抱えられて二人のサラシで隠しているがふくよかすぎる胸が押し当てられているのであるため、紅白の巫女服に髪型をポニーテールに束ねてプリキュアたちからも羨ましい麗しい腰まで伸びてしまう黒髪にミニスカートと言う格好だったので、加音町の住民は理輝が男だと分かってなかったのである。
　龍音達は折角のハロウィンイベントを楽しんでいたのであった。
　だが、こんな時でも、
【弥生様、何でしょう？　音符が】
『わかってる、そこの変な仮装してる奴らが狙ってるしね』
「音符？」
『さてと、ボク達はと』
　どうやら天夏達も音符が見えているらしく、ハロウィンの飾りのカボチャであるジャック・オー・ランタンに憑依したのを見ていた天夏達は、各自戦闘態勢に入り、龍姫達と龍音達は人込みに紛れてその場から離れて変身できる場所を探しに向かったの

であった。
「ファルセット!!」
「なに?　コルセット?」
「「誰が!!　コルセットだ!!　ファルセットとバスドラとバリトン!!」」
「パズドラとバリトンね」
「おい!!」
「こうなったら!!　出でよ!!　ネガトーン!!」
「!!」
　アコに気が付いたらしい完全に突っ込んでほしいと言わんばかりのド素人の変装もとい仮装で加音町のハロウィン会場に乗り込んできたトリオ・ザ・マイナーたちはメフィストが元に戻ってもやることは一緒だったのであった。
　そして、ジャック・オー・ランタンのネガトーンが現れてしまったのであった。

異世界の戦士の変身!!

ハロウィンの定番のカボチャで作られた装飾品「ジャック・オー・ランタン」にメフィストが元の姿に戻ったことでトリオ・ザ・マイナーがやりたい放題と言った感じでアコにも笑われる仮装で姿を見せているのであった。

「何よ!!　この嫌な音は!!」

「耳障りですわ（＞＿＜）!!」

「クッ!!　音で攻撃してくるとは!!」

「なんで!!　おまえらは大丈夫なのだ!!?」

「体質的に「プリキュア」に近いと言った感じなんでね!!」

「おまえらは、一体何者なのだ?!!」

ジャック・オー・ランタンのネガトーンの力で町中の人々が悲しみ出したが、天夏達は耐性があるので耳障りの音としてしか聞こえてないのである。

流石のラウラ・ボーデヴィッヒも音による攻撃を受けて耳を塞いでしまったのであった。

龍姫達が居なくなっていることには目もくれずプリキュア達は変身する体制をとっ

ている状態で、朱音とスミレは近くの建物の窓ガラスにお互いのカードデッキを映して、腰に銀色のVバックルを巻いたのであった。

そして、理輝は右腕を上に伸ばし、そこに赤いカブトムシ型のメカにしてマスクドライダーシステムであるカブトゼクターが収まり、紗季も軽く構えて腰に金色の賢者の石が嵌められているオルタリングと呼ばれるベルトを呼び出したのであった。

そして、同じく弥生もあのバックルをへその辺りに当ててベルトが巻かれてトリオ・ザ・マイナーがお約束のセリフを言った瞬間、

《ドライバーオン!!　プリーズ!!》

「通りすがりの仮面ライダーだ!!　覚えて置け!!」

天夏達「変身!!」

《ＫＡＭＥＮ　ＲＩＤＥ　ディケイド!!》

《シャバドゥビタッチヘンシ〜ン　プリーズ!!　ヒーヒーヒー!!》

《ＣＯＭＰＬＥＴＥ!!》

《ＨＥＮＳＩＮ》

プリキュア一同「ウソ（。д。）！!!　変身した（。д。）！!!」

世界をまたにかける仮面ライダーである証明のセリフを弥生が述べた瞬間に天夏と祐姫の「ウィザードライバー」の音声がうるさいが〆て、一斉に変身したのであった。

それを見た響達は驚いて変身するのをやめてしまったのであった。
「何をぼさっとしてる!!」
「ううん!!　行くよ!!」
響&奏&エレン&アコ「レッツプレイ!!　プリキュア・モジュレーション!!」
「さてと、わたし達はお空のお掃除と行こうか?　黒龍」
「そうだね、あの子達のステージは邪魔させない!!」
固まってしまった響達に神姫化した龍姫達が喝を入れて響達は我に返ってプリキュアへと変身を始めたのを見届け、上空で高みの見物をしゃれこんでいる者達へのお礼参りをするのであった。
「折角、「プリキュア」もいるんだし一緒にやろうか」
スイートプリキュア&仮面ライダー一同「さぁ、おまえらの罪を数えろ!!」
「罪なんか数えてない!!」
お空のお礼参りに龍姫達が向かったのを確認した仮面ライダーに変身した天夏達は、プリキュア達にあの決め台詞を一緒にしないかと持ち掛けると、一緒に左手で指鉄砲の構えで罪を犯した者達へ告げるあのセリフを言って決めて戦闘へ発展したのであった。

異世界の戦士との共闘

天夏達は、一斉に自分達のベルトを腰に身につけて、ベルトを持たない天馬と瑛夏とセドナはバリアジャケットだけ展開したのであった。

そして、一斉に仮面ライダーに変身したのであった。

それを見た響達はあまりの光景に驚いてしまい自分達の変身を忘れてしたのであった。

確かにまさか、自分達以外それも「プリキュア」ではない人々の自由のために戦う「仮面ライダー」に変身してしまったのだから。

天夏と祐姫が魔法使いと宝石の仮面ライダーウィザードフレイムスタイルへ、なぎさは敢てベルトさんこと「ドライブドライバー」ではなくアイテムパックからファイズギアで「5」をファイズフォンで入力してバックル部分にセッティングして横に倒して体を赤いフォトンストリームが纏い仮面ライダーファイズに変身して右手のスナップを利かせて、朱音とアンナと更識姉妹とスミレが近くの窓ガラスに黒い長方形のケースを映して腰に銀色のVバックルを巻き、窪みに持っている黒い長方形を差し込んで、朱音が赤い龍の仮面ライダー龍騎にそしてスミレが西洋の騎士と蝙蝠をモチーフにした銀

色の装甲の仮面ライダーナイトに変身し、星奈は敢て「ゴーストドライバー」で戦場で軽やかに踊るパーカーに気が抜けるが覆いかぶさって「仮面ライダーゴースト」に、シャルはカイザフォンを手慣れいるのか回転式で開けにくい上に、変身コードが「９１３」と配置的に打ちにくい数字を手早く打ちこんで元の形に戻し、ファイズと同じ形式のバックルなのだが、気に行ったのか、斜め入れで横倒しにして、ギリシャ文字のχの仮面ライダーカイザに、そして、更識姉妹も白鳥の仮面ライダーにして女性専用の仮面ライダーファムへ、弥生と一刀はディケイドライバーにカードを入れて横にレバーを押して、弥生がマゼンタ色で、緑の複眼に対して、一刀は黒に青い複眼であり、両者とも、「１０」を意味する「十」と「Ｘ」のラインが入った、弥生が仮面ライダーディケイドに、一刀が仮面ライダーダークディケイドへ変身を完了したのであった。

セシリア達はネガトーンの影響を受けないが、まだ変身アイテムを貰っていないので、戦いの邪魔にならないように避難したのであった。

流石に街中でインフィニット・ストラトスことＩＳを展開する位のことは弁えているのであった。

「もう‼　朱音と同じのがあれば‼」

「仕方ないですわ‼　此処は見守るしかないですし」

「軍人であろう者が、あんな奴らに」

やっぱりセシリア達も加勢したかったが、今は堪えて避難するしかなかったのであった。

「プリキュアと変な剣士で手がいっぱいって言うのに!!　え～い!!　ネガトーン!!」

「軽く手始めに!!　これから」

《ＫＡＭＥＮ　ＲＩＤＥ　ＫＵＧＡ》

プリキュア&トリオ・ザ・マイナー「ウソ（。д。）！　姿が変わった!!」

「ボクもお見せしようかな」

《ＫＡＭＥＮ　ＲＩＤＥ　ＤＥＮ―Ｏ》

「こっちは、「桃太郎」ね」

トリオ・ザ・マイナーの三人はもう既に手の打ちようがない状況に置かれてしまったらしく慌てふためいており、それでも、手加減する気は全くないプリキュアと仮面ライダーだったのであった。

特に、ディケイドとダークディケイドによる「別の仮面ライダーに変身してその能力を使用するという」ことに目が点になってしまったプリキュア達なのであった。

神姫化している龍音から妖精からもらうプリキュア以外の能力を借りてしか自分達には出来ないプリキュア達は物珍しいと感じていたのであった。

プリキュア達は「仮面ライダーは怪人並びに敵組織と同じ能力を用いて戦う人々の自

由のための戦士」ということ、そして、目の前にいるキュアスノーは元は、魔法少女バトルに巻き込まれて手に入れて死の恐怖に怯えながら龍音に助け出された数少ない生存者であることは知る由もなかったのであった。

「さてと、ここは「合体技」で決めようか!!」

「はい!!」

「そうとなれば」

「出でよ!!　全ての音の源よ!!」

《ＦＩＮＡＬ　ＡＴＴＡＣＫ　ＲＩＤＥ　ＫＵＫＵＫＵ　ＫＵＧＡ》

《ＦＩＮＡＬ　ＡＴＴＡＣＫ　ＲＩＤＥ　ＤＥＤＥＤＥ　ＤＥＮ－Ｏ》

《ＦＩＮＡＬＶＥＮＴ》

《オメガドライブ》

　まさかの仮面ライダーディケイドに変身している弥生から合体技の提案をされてしまったメロディ達は頷き、仮面ライダー達は各自、必殺技の構えをして、そして、一斉にジャック・オー・ランタンのネガトーン目掛けて、ライダーキックと飛翔斬そして、メロディ達はなぜかプロレス技の「クロスチョップ」の構えですり抜けて、仮面ライダー達共に、

　メロディ達「フィナーレ!!」

「ねが～!!」

止めを刺して残心をしながらジャック・オー・ランタンのネガトーンの断末魔を背にしていたのであった。

暗躍する影

無事にトリオ・ザ・マイナーが嗾けてきたジャック・オー・ランタンのネガトーンを浄化することに成功した一行は変身したままトリオ・ザ・マイナーの方を向いたのであった。

「くそ～!!」

「ベターな行動だな?」

「聞いてた通り、あなた達が、「スイートプリキュア」なのね?」

「はい・・・まさか」

「知ってましたよ。北条響さん　南野奏さんに、メジャーランドの歌姫、黒川エレンさん、メジャーランドの姫君、アコ様」

「どうして、知ってるんですか?」

ジャック・オー・ランタンのネガトーンが浄化された瞬間、尻尾を巻いて逃げることしか手段が残されてなかったトリオ・ザ・マイナーの三人は一目散に逃げて行ったのであった。

天夏達は、態と泳がす形で追うことをしない変身を解除して、それを見たメロディ達

も変身を解除していたのであった。
そして、スミレは響達がプリキュアであることを前もって知っていたことを告げたのであった。
龍音達の親友となれば情報の出所くらいはいくらでもあるのだ。
龍音辺りがおしえたのであろう
頭に人魚姫のようなカチューシャを付けている所為で説得力に欠けるが待ち前の分析力と洞察力で響達プリキュアであり、エレンとアコの身分まで言い当ててしまったのであった。
流石にセドナに見破られてしまっては何も言えない響達は、どうして自分達の事を知っているのかと聞いてしまったのであった。
天夏達は、次元武偵と言う、武装を許可された探偵、つまり、簡単に言えば、「二人で一人の探偵にして仮面ライダー」が該当するが、向こうは縁の下の力持ちとしての活躍しているが、龍姫達は旅客機以外なら研修を受けさえすれば高校生以上で運転する免許が許されているのである。
職業柄あまり教えるわけにはいかないのだが、
「簡単なことだ。わたし達以外で、さっきの精神的の攻撃に耐性を持っている者がいるならば」

響達「あ」
と言った感じでばれていたのであった。
その時だった。
「ドン!!」
響達「え・・・ええぇぇっぇぇぇ（。д。）！!!　人が（。д。）！!!」
「どういうこと二ャ（，ω，）？」
「こいつら、さっきの戦闘で疲労しきった瞬間に、プリキュアを拉致しようとしてたらしい、詳しいことはこちらに任せてくれ」
「はい・・・」
なんとどっからともなくバリアジャケットを纏った数人の男たちが地面に横たわった状態で現れたのであった。
流石のプリキュアである響達もこの状況驚いてしまったようで、アホ毛と前髪が金色のメッシュが入ったハイブリッドツインテールの黒紫色の軽鎧を身につけている神姫化した龍姫が事情を説明して、そのまま転移したのであった。
そして、天夏達は、響達共に加音町のハロウィンイベントを楽しむのであった。

紅き

トリオ・ザ・マイナーの襲撃をカモフラージュにして、メロディ達が披露した瞬間に何かしらの理由をでっちあげて連れて行く気満々だった時空管理局の魔導士部隊は神姫化した龍姫達によって壊滅並びに天界の拘置所へ送られたのであった。

ネガトーンにされたジャック・オー・ランタンは元のカボチャに戻って街の人々も悲しみから解放されて無事に加音町のハロウィンイベントを楽しむことが出来たのであった。

それから数週間の時が流れたのであった。

と言っても龍音達はさほど時間が流れていない理由があるのだが。

「「ノイズ」が動き出した（。д。）！‼」

「言っておきますけど、そちらの知っている「ノイズ」ではないですよ‼　オルフェノクのような灰にする能力は有りませんから‼」

「そうか」

「では、さて、行きますか」

龍音達は別件の仕事を片付けて拠点の戦艦であるフラクシナスで調辺音吉が昔封印

したとされる「ノイズ」と呼ばれる存在が封印が解けてしまったというのだが、そこに空前居合わせた、「風鳴翼」と「立花響」が「ノイズ」と聞いて表情を変えたのだが、龍音が「ノイズ」でも「そっちの世界のノイズではないと」説明して解散して、龍音は加音町へ向かったのであった。

「これと言って変わった所はないね」

『お嬢様、気を付けてください』

「わかってる」

加音町に到着した龍音は街を見下ろせる丘にやってきたのであった。

その丘から街を見下ろした龍音は何も異変が感じられないと言ったことを呟くと龍の手に握られているように作られたペンダント型インテリジェントデバイス「玄武」が何かに気付いているが、もちろん、龍音も気が付いていたのであった。

様子を見て、街へ向かおうとしたところで、

「どこへ行くんですか?」

「街へ、渡さんもですか?」

「いいえ。ちょっとした、散歩です」

「そうですか」

「どうやら、キミに会っても「カード」が生み出されるようですね」

「そうですね。また、会いましょう‼」
「あいつ、きっと無茶する気だぜ、良いのか渡？」
「大丈夫、あの子はこれから起きる出来事を解決することが出来るはずだ」
龍音より少し背が高い青年と金色の蝙蝠のような生き物に出くわしたのであった。
龍音はどうやら以前に会ったことがあるようで、その青年こそ、仮面ライダーキバである紅渡だったのだ。
二人は一言二言言葉を交わした瞬間、龍音の目の前に「キバ」のカードが現れたので、龍音が預かる形で加音町へ向かったのであった。
その後ろ姿を紅渡とキバット三世は見届けていたのであった。

新たなメンバーと不穏な動き

龍音は単身で調辺音吉から聞かされた「ノイズ」と呼ばれる負の感情が具現化した存在を封印した話を聞いていたので、天界のオペレーターからの情報で活動を開始したと聞かされた以上は行かないわけがないと龍音は加音町へ向かったのであった。

その道中で紅渡とキバット三世に出くわして挨拶を交わしたのだ。

「奏太、奏は？」

「響姉ちゃん達と一緒にアコのとこ行ったけど、あ‼」

「どうしたの？」

「龍音兄ちゃん達にならわかるかなって、「これ」わかる？」

「（もしかして、あの時の‼　お姉ちゃん達が回収し損ねたのかな）これどこで拾ったの？」

「ハロウィンイベントの帰り道だ。後で交番に持って行こうとしたんだけど・・・」

「（もしかして、奏太って）できなかった理由は」

龍音は調べの館に行く道中で南野奏の実弟の南野奏太に声をかけて響達のことを質問したところ、みんな一緒に調べの館へ向かったと教えてくれたのだが、奏太がポケッ

トからある物を取り出して、龍音に見せてくれたのであった。
それは正しく時空管理局が使用する「デバイス」だったのであった。
形は龍音と同じペンダント型で水晶部分が六角形の黒色のものだったのであった。
どうやらノイズから解放されてハロウィンイベントから帰宅する道中で拾った物と言うので後に交番に届けるつもりだったのだが、どうやら龍音は察しているが敢て聞くことにしたのであった。
だが、その答えを聞く間もなく、ある者達に、
「なんだよ‼」
「君が拾ってくれたのか？　返してくれないか？」
「（バインド‼）「時空管理局」であろう者が一般人に向かって魔法で拘束するとは、「時空管理局」も地に墜ちたようですね。目的は、「南野奏達（奏太の姉）」の身柄を拘束することではないのですか？」
「（どうして、それを‼）おまえらが知ったことか‼」
「（ご丁寧に外に気づかれないように結界まで、よくある単独行動での敵との遭遇、慣れちゃいるけど）」
「言っておくが、何かしようとするなら、この小僧とまとめて・・・」
「まとめて、どうするんだ？」

『ナイス‼』
「やっちまえ‼」
　表向きは時空犯罪者の取り締まりを担っているが裏では魔力を待たない人々が無碍にされているという「魔法主義」を掲げているためか、いつまでたっても人手不足と言う組織だったが、フラクシナスのメンバー並びにアドリビトム組と凛々の明星の協力の元、闇が露見して壊滅したのだが、どうやら、まだ活動していたようで、相変わらずの「質量武器違反」要するに、剣道で使う、竹刀などもそれに入れられているという、と言うより、ミッドチルダではあまり接近戦に対する技術があまりないのかと言いたいくらいに、強引に南野奏太にバインドで拘束したのであった。
　それを見て呆れた龍音に言い負かされた自称・時空管理局員の女性はボロが出てしまい、南野奏太を人質にしようとしたが、明らかドスが効いた声だが、義姉である、美龍飛と龍華が自称時空管理局員の女性を睨みつけていたのだが、その女性は気が短いらしく、物陰に隠れているであろう仲間に合図を送ったのだ。
「(クッソ〜‼　オレの所為で、龍音兄ちゃんたちが　ん？)」
『認識完了。南野奏太、問います、あなたは「力」を欲しますか？』
「勿論だ‼」
「何‼」

「どうやら、おまえらの負けらしい」
「チッ‼」
「それが、おまえの「バリアジャケット」か、似合ってるぞ」
「解除しろ」
「解除‼　出来た」
「(なのはさんより素質ある)」
奏太が握りしめているデバイスが反応して、光り出し、奏太が戦う意志があると認識し、光が収まると、騎士風の軍服姿に、腰に軍刀が帯刀された姿になった奏太が姿を現したのであった。
これを見た自称時空管理局員達は一目散にに舌打ちをして逃げて行ったのであった。
龍華がバリアジャケットを解除するよう言うと奏太はいとも簡単に解除して見せたのであった。

解き放たれし封印

奏太が拾ってしまったインテリジェントデバイスが奏太を新たなマスターとして認識したようで、バリアジャケットを纏った奏太が現れた瞬間に、自称時空管理局員達は尻尾を巻いて逃げて行ったのであった。

「奏太、これからどうするかは、自分で決めてほしい」

「わかった。オレ、やるよ。できる限りだけどな」

「ああ、それで構わない」

「龍音兄ちゃんたちが時空管理局の汚職を暴いて潰したんだろ、なんで」

「正確には、違う部署が解決したんだ。これを話せるのは「民間協力者」と認められたということだから」

龍音と合流した義姉にして同じく元超次元ゲイムギョウ界第一女神候補生であったネプギア改めライブメタルの適合者である美龍飛と親友にして相棒の元第一女神候補生ユニ改め元銃火器使いだったが今は可変式大剣使い飛行島で言えば「バーサーカー」と呼ばれる龍華が奏太にインテリジェントデバイスについて説明をし、奏太にインテリジェントデバイスを保有する資格があるのか見定めたところ奏太を民間協力者に認め

たのであった。
　まだ奏太は小学生だが、ミッドチルダではもう既に隊員として戦場に駆り出されている年齢に達しているのと、数少ない男にして「リンカーコア」の持ち主なのだから、もし、レジアスが生きていたら必ず、南野奏太をどんな手を使っても勧誘したであろう。
　それも今になっては過ぎ去ってしまったのである。
　奏太の意志を聞いてほっとした龍音達は調べの館へ赴くことにしたのであった。
「音吉さん‼」
「どうやら、封印が解けてしまったらしい」
「メロディ達は？」
「あそこでノイズと」
「やるしかないようだ」
「姉ちゃん達が・・・まさか‼」
「待つんじゃ‼　行ってしまったか」
「ん？　危ない‼」
「大丈夫ですか？」
「君こそ、大丈夫のようだな」
　奏太に気づかれないように神姫化した龍音達は調べの館の主である音吉に状況を聞

くとノイズが響達が集めた音符を吸収して鳥人のような姿で完全体にはなっていないが、封印した音吉を取り込んで完全体になるつもりだったところを龍音がいとも簡単に日本刀で斬り払って音吉を守ったのであった。

それよりも先に奏太が無意識にバリアジャケットを纏った姿になってメロディ達が戦っている場所に行ってしまったのであった。

「龍音、頼めるか？」

「勿論だ。お姉ちゃん」

「良いのか、妹さん一人で行かせて」

「あいつの方が「ノイズ」との相性がいいからな」

ダブルロックオンでＺＸフォームになっている美龍飛は龍音にノイズを任せると言って龍音はメロディ達の元へ向かったのであった。

白銀の少年騎士

調べの館に到着して早々に如何にも鳥と西洋の竜が合わさった異形らしき存在こそ、調辺音吉が昔に封印したはずだったが、響達が集めた音符を吸収したことで封印が解除されて、調べの館が浮遊要塞と化している状態での戦闘になっていたのであった。

龍音達が到着した時はまだ地上にあったのだが、ノイズが空中に移動したのでそれに伴って調べの館を浮遊要塞と化していたというのだが、そんなことを言っている場合ではない。

「ピーちゃん!!」

「我が名は「ノイズ」だ」

「必ず、あなたを」

「こざかしい!!」

傷だらけになりながらも復活したノイズと戦いを繰り広げているメロディ達は必死にノイズを「倒す」のではなく「救う」ことにしていたのであった。

彼女たちは知らないが、ここにはいないが仮面ライダーブレイドこと剣崎一真が親友にして同じく仮面ライダーとして戦った戦友しかし正体は勝利すれば世界が崩壊する

存在「ジョーカー」である相川始ごと世界を救うべく取った行動が「自らもアンデットと化して勝敗を無にするという」方法で仲間達の元から離れたが、鳴滝か時空管理局辺りがしでかしたのであろう、伊坂ことピーコックアンデッドなどが出現したことでバトルファイトは終わらなくなってしまったのと伊坂が全くと言って自由奔放に旅をし始めたので、どうやらある程度の人間との共存が出来そうな状況になってしまったのだが。

閑話休題

アコにピーちゃんと呼ばれたがもう既に戦闘態勢に入ってしまったためか、光弾を放ってきたのであった。

それを、

「させるかよ!!」

「そ・・う・・た・・・ええっぇぇぇぇぇ（。д。）!!!!!!!!!!」

【スゴイ、もう無意識に防御結界まで無詠唱で、あの白き魔王より飲み込みが早いかもしれない】

「よ、姉ちゃん」

「よ、じゃないわよ!!　って!!　なんでわたしだって気づいてるのよ（。д。）！!!　」

「奏!!　そんなことを言っている場合じゃないよ!!　奏太、あとで話してね!!」

「あれ？　仮面の龍剣士は？」
「忘れてきた」
「もう!!　って言ってる場合じゃない!!」
無意識なのだろう白銀の軽装の鎧を身に纏った奏太がメロディ達の前に立ってビートの防御技を真似た感じでミッド式の魔法陣がノイズが放った光弾を防いでいたのであった。
リズムはまさか、助けに来てくれたのが実弟であることに驚いたが、今の状況でそんなことを言っている場合ではないのだ。
気持ちを持ちなおして、メロディ達プリキュア達ともにノイズを救うための戦いが始まったのであった。

あの曲

ノイズ復活の知らせを聞いた龍音は一人先行してインテリジェントデバイスを拾ってしまった南野奏太に出くわした所で明らかに誘拐同然に連れて行こうとした裏で犯罪組織と繋がっていた時空管理局員達に襲撃されたが、義姉達に助けられて、奏太が魔導士と言うよりフレン・シーフォに近い魔法剣士に覚醒したことで時空管理局員達は退却を余儀なくされたので、龍音は義姉達ともに現場へ急行する際に奏太が付いて来ることを想定して奏太の見えない範囲で神姫化してバリアジャケットを纏った状態で飛行して、現場である調べの館に到着して早々に巨大な鳥のような存在とメロディ達、スイートプリキュアが戦っている場所へ白銀のロングコートのバリアジャケットを纏った奏太が防御結界でノイズが放った光弾から実姉達を救った奏太に驚くがそんなことを言っている場合ではないことはスイートプリキュア達はノイズと戦うのであった。

「さてと、親友として、手伝ってやるか」

そう言って、神姫化した龍音は仮面の下で笑みを浮かべて愛刀ではなくバイオリンケースに手をかけてバイオリンを取り出したのであった。

何故日本刀ではなくバイオリンを手に取ったのかと言うと、ノイズが人々の負の感情

が具現化した存在であることにいち早く龍音は感づいていたのであった。
　たとえ、女神制度が無くなろうが、人々の負の感情を察知できるところは流石、超神次元ゲイムギョウ・プラネテューヌ第二女神候補生にして、武偵チーム「流星の絆（ビブロスト）」の一員と言ったところだろう、神姫化した龍音は迷うことなく、バイオリンを持ち、
「♪～」
「え？」
「姉ちゃん達‼　あそこだ‼」
「なんだ・・・・この旋律は・・・」
「今だ‼　メロディ‼「ノイズ」を救え‼」
「うん‼　ありがとう」
　演奏し、ノイズが浄化されだして、動きが鈍ってきたことでクレシェンドフォームで龍音達のような空中戦を繰り広げていたメロディ達に突破口を開いてあげたのだ。
　メロディ達いや、メロディはバイオリンを弾いている龍の仮面をした黒紫の神姫化とは言え、何かに気づいたかのような表情を一瞬して、そして、
「これで、わたし達の勝ちだよ・・・」
「まったくだ・・・・」
「よっしゃ‼」

止めを刺すのかと思われたが、メロディは有ろうことか、いや、わざとであろう、人間体のノイズの手を掴んだのであった。
その意味をノイズが感じ取ったのであろう、元の小鳥の姿になったが、体色が白になっていたのであった。
それを見届けた神姫化した龍音は黙って立ち去ろうとしたのだが、
「待って‼」
「・・・・・」
「あなた、「龍音(リオン)」でしょ‼」
「待ちなさいよ‼　龍音は「男」よ（＞＿＜）」
「ふん、いずれ、近いうちに、また、会おう」
「あ（間違いない、あの曲は、龍音しか知らない曲）」
メロディに呼び止められたのであった。
神姫化した龍音は仮面の下で笑みを浮かべながら、龍音と呼ばれたので、また笑みを浮かべ、そのまま、立ち去ったのであった。
メロディは知っていた「風といっしょに」と言う曲は四年前に龍音がメロディつまり響にしか弾いていないのだから

ゲイムギョウ界にプリキュア?

スイートプリキュアチームと南野奏太達がノイズと戦って神姫化した龍音が奏でるバイオリンの音色は飛行島で教わったのであろう「ソウル又は魔力を音色に乗せて浄化させる」と言う攻撃方法の助太刀によりメロディはノイズを「救って」見せたのであった。

それを妨害する輩を結界の外で美龍飛と龍華が阻止していたのだから、それから時が流れたのであった。

「今日は土曜日だし、指名依頼もないから、またにはプラネテューヌの街でも行こうっと（＞＿＜）!!」

「龍音ちゃん!!」

「みんな!!　一緒に来る?」

「うん」

どうやら、龍音達は次元武偵の仕事が一段落したのと、姉達からたまには遊んで来ればと言われたらしく、最近では仕事などでしか行かなくなった超神次元ゲイムギョウで龍音が第二女神候補生時代を過ごしていた街で紫の大地「プラネテューヌ」へ向かった

のであった。
　プラネテューヌは四ヶ国の中でも、衣食住とより取り見取りと言った近未来な街なため、遊ぶにはちょうどいいのだ。
「久しぶりのプラネタワーからの景色はいいね」
「龍音さ～ん（＼＿＼）!!」
「どこ行こうか?」
「とりあえず、街に行かないと」
「いい加減に・・・」
「!!」
　久しぶりにプラネタワーの展望台から街を見降ろした龍音達は景色を堪能していたところに、女神国家時代からプラネテューヌの政治に携わっていた人工生命体イストワールことぃーすんが龍音に涙ながら泣きつてきたのだが、もう女神は女神であるため、女神が人間の政治に関わないと決めたのだが、こうして、女神国家を築いて欲しいと言いよって来るのであった。
　龍音はいつもの手慣れた様子で天龍達を連れて、街へ移動しようとした瞬間、何かが来る気配を感じ取ったのであった。
　その気配は的中したらしく、

「なんで‼　空中なの（。д。）！‼」
「とととととりあえず、奏、変身だよ‼」
「響‼　こおこここんな状況じゃ‼（。д。）！‼」
「姉ちゃん達、なんで一人で変身できねえんだよ‼　もうオレとアコとエレン姉ちゃんはできたぞ‼」
「はぁ（ ☒・ω・☒ ）　仕方ないな」
　超神次元ゲイムギョウ界のプラネテューヌの郊外にあるバーチャルフォレスト付近に向かって響達が空から落ちていたのであった。
　龍音達は今いる場所から仕方なく、落下地点へ神姫化して向かったのであった。
　単独変身できる奏太とアコとエレンは変身を終えていたが、まだ、単独で変身できない響と奏はそのまま、バーチャルフォレストの森に落下したのであった。
「姉ちゃん達、生きてるか?」
「なんで、一人で変身できないのよ」
「大丈夫、怪我はないわね」
「この粗大ごみに助けられた」
　どうやらあの場所に難とか奏太達が変身していたので、腕を掴んで、落下速度を殺しながら、幸いにも下にボドボドならぬボロボロで捨てられていたソファの上に落下で来

たので無傷であった。

巨大スライヌ

超神次元ゲイムギョウ界のバーチャルフォレストの秘密の場所へ落下した響と奏は無事だったのであった。
「此処、どこだろう？」
「落ちてる時に街が見えたから、街に行けばいいのよ」
「こっちに道があったぜ!!」
「待ちなさいよ!!」
此処のままでは日が暮れるだけだと考えた響達は奏太が見つけたバーチャルフォレストの道を伝って街へ向かったのであった。
奏太とエレンとアコは怪しまれないように変身を解除したのであった。
「なんで、飛んで行っちゃいけないんだよ!!」
「もう!!　すこしは考えなさいよ!!　人間が飛行機に乗らないで空飛んでたらおかしいでしょ!!」
「あ、そっか」
幻想郷なら良かったがそんな場所を知るはずがない響達は超神次元ゲイムギョウ界

のことを知らないので飛行しては余計に不都合が起きると思っていたらしく、一行は陸路でプラネテューヌの街に向かって行ったのであった。

だが、それも、うまくいくはずがなく、

「ヌラ〜!!」

「えええええ（。д。）！!!　スライム（。д。）！　此処はドラ〇エなの（。д。）！!!」

「完全に囲まれたわね（☒・ω・☒）」

「そうだね、奏!!　変身だよ!!」

「ええ!!」

「姉ちゃん、こいつら合体し始めた!!」

危険種の魔物などには遭遇しないで無事にバーチャルフォレストの外へ抜けれた響達だったが、犬のような顔をしているゲイムギョウ界ではおなじみの「スライヌ」の大群に出くわしてしまったのであった。

プリキュアとは言え見知らぬ土地で魔物に遭遇したのだから驚いてしまったのであった。

するとスライヌの群れは一斉に合体して巨大スライヌに変貌してしまったのであった。

響達はプリキュアに変身を試みようとしたが、

「ヌラ～!!」
「キャ～!!」
「これじゃ!!　変身できない!!」
「何か、武器があれば」
　やはり初見とゲイムギョウ界での戦闘に遭遇してしまったのと、戦闘前に変身していればと言う状況に陥ってしまったのであった。
　なんとか、奏太達は変身を終えていたが、響と奏は、「二人の呼吸を合わせないと変身できない」と言う条件があるために、巨大スライヌの攻撃によってなかなか変身できない状況に陥ってしまい、響は持ち前の運動経験でなんとかなっているが、奏は避けるのが精いっぱいなようで、響はない物ねだりで、近くに武器になりそうなものを探していたのであった。
　そこに、
「「魔神剣!!」」
「あの技は!!」
「貴様ら、どうしてこの世界に、と言いたいところだが、こいつを片付ける方が先決だな」
「ありがとう」
　龍の仮面をした神姫化した龍音達が手に得物を持って斬撃を放って巨大スライヌを

怯ませた所で、響と奏は合流したのであった。

幻想郷からの

響達が超神次元ゲイムギョウ界に迷い込んでしまった上に、時たま遭遇する巨大スライヌに襲われていたところを、神姫化した龍音達が巨大スライヌからの攻撃から響と奏を守ったのであった。

「今だ‼」

「「レッツプレイ‼　プリキュア・モジュレーション‼」」

「爪弾くは・・・」

「やっている場合か＜、へ、＞‼」

「はい（。д。）！‼」

「そうだろう・・・姉ちゃん達（ ⊠・ω・⊠ ）」

ようやく響と奏は変身したと同時にいつものセリフを決めようとしたが、現在神姫化している龍音に怒鳴られて、きびきびと戦闘に入ったのを見て、奏太は軽く引きながら、実姉達の光景を見ていたのであった。

「ヌラ～‼」

「無事になんとかなったわ」

「ありがとう」
「何故、貴様らが、この「世界」にいる？　大方検討は着いているが、仕方ない、わたし達について来い」
「そう言うことだから・・・」
「そうね」
「世界？」
「詳しい話は、着いてから話してやる‼」
「って‼　お姫様抱っこするの（。д。）！‼」
「空を飛んで行かないと、目立つだろ」
　さほど時間もかからずに止めは後から合流した軍時代に着ていた物と似た白いジャケットに黒い短パン姿の奈凰龍が義叔母が代金を前もって建て替えられてプレゼントされた素人でも扱いやすい黒い柄巻の日本刀で斬り捨てたのであった。
　スイートプリキュア達は何度も龍音達の日本刀を見ているのだが、今も、自分と同年代が真剣である日本刀を所持していることに驚きを隠せないでいたのであった。
　そして、龍音達は手慣れた感じで回転納刀で鞘に愛刀を納めて、奈凰龍は粒子化して見せたのであった。
　とりあえず、詳しい説明をするべく龍音達はお姫様抱っこでスイートプリキュア達を

プラネテューヌの元プラネテューヌ教会に向かうことにしたのであった。
メジャーランドの姫であるアコはなぜか奏太がお姫様抱っこをしていたのであった。
奈凰龍はぼちぼちと行くと言って陸路でプラネテューヌの街へ行ってしまったのであった。
「着いたぞ。今すぐ、貴様らを元の世界へ送ってやるから」
「えええ‼　もう少しいいじゃない‼」
「そうは言っても、向こうで心配してるんじゃないのか？」
「今日は土曜日だし‼」
「わかった、どうしてこの「世界」に来たんだ？」
「それは、吸い込まれた‼」
無事にプラネタワーの屋外展望台に降り立った龍音達は抱きかかえていた響達を下ろして加音町に送り届けようとしたが、好奇心旺盛なのか響がもう少し超神次元ゲイムギョウ界に居たいと言い出したので、神姫化しているが根は心優しいのか龍音は観念して響達に超神次元ゲイムギョウ界にやってきた理由を聞くとなんと亀裂に吸い込まれたといいだしたのであった。
「どう？　超神次元ゲイムギョウ界は？」
「‼」

「そう警戒しなくてもいいじゃない、わたしは、八雲紫よ　そこの侍とは知り合いなの」
「紫さ～ん＜、へ、＞!!　証拠にもなく、「スキマ」で」
　なんと、幻想郷でも滅多に姿を見せないと恐れられている通称「スキマ妖怪」と呼ばれている金髪に陰陽師が着ていそうな服とドレスを合体させた服に頭には赤いリボンが付いた白いナイトキャップを被った八雲紫がなぜか超神次元ゲイムギョウ界プラネタワーの龍音達の前に姿を現したのであった。

「」

超神次元ゲイムギョウ界に一泊するプリキュアの段

幻想郷にいるはずでそれでも神出鬼没と言う言葉が似合う妖怪「八雲紫」（ヤクモユカリ）がどう言った経緯なのか、超神次元ゲイムギョウ界に自らの能力であり、龍音達も使うことが可能な「境界を操る程度の能力」で次元に亀裂つまり「スキマ」を使用して、現れたのであった。

いきなりの登場にスイートプリキュアと奏太は何も言えなかったのであった。

「初めまして」

「北条響、南野奏、奏太、黒川エレンまたはセイレーン、調辺アコ」

「ウソ（。д。）！　どうしてわたしたちの名前を‼」

「そんなことくらい、簡単に調べられるわ、伝説の戦士「プリキュア」ということも、もう、あなた達のやっているお仕事のこと話してあげたらいいじゃないのかしら？」

「お仕事？」

「いいだろ、紫さんに免じて教えてやる」

とりあえず、自己紹介をしようと名乗ろうとした響達だったが、もう既にスイートプリキュアメンバー全員の近辺調査を済ませていたようで、勘が鋭い龍音に気づかれてな

い手際の良さには納得するしかなかったのであった。

そのため、名前をいい当てられたスイートプリキュアメンバー全員は驚いてしまって、そんなことを気にするきはないようで、八雲紫は神姫化している龍音にいい加減に次元武偵の仕事を教えてやったらと言ったので、龍音は八雲紫に頭が上がらないのでスイートプリキュアメンバー全員に教えることにしたのであった。

インフィニット・ストラトスこと「ＩＳ」やミッドチルダの「最高評議会」にテルカ・リュミレースの「闇」に名深市で起きた「魔法少女育成計画と言う名の殺し合い」ついてなど、一通り龍音はスイートプリキュアメンバー全員に教えたのであった。

もちろん、

スイートプリキュアメンバー全員「絶対‼　許せない‼　（ねぇ）‼」

「おい、ここで絶許されても困るんだがな」

「あ、（m゛・ω・、）m　ゴメン…」

「ＩＳも普通に宇宙に行けばいい良かったじゃない。つぼみが聞いたら「堪忍袋の緒が切れました～」って言うよ　女尊男卑なんか間違ってる」

「「魔力」がない人を雇えば、人手不足は解決できるってのに」

「いずれ、そんな奴らと戦わないといけない時が来る、悪いが」

「此処まで聞いた以上は、とことん」

スイートプリキュアメンバー全員「付き合ってあげる（わ）‼」
「わかった、貴様らを「民間協力者」として認めてやる、協力は「任意」だ」
「鳴滝のおっちゃんもカンカンだろうな」
「此処まで聞いちゃった上に降りちゃ、「女が廃る‼」から」
「これが、わたしとの連絡端末だ」
予想通りスイートプリキュアメンバー全員は怒りを露わにしたのであった。
龍音は手を引くように言うと、響達は全く持って頑なに退く気はなかったのであった。
何も罪がない者達が虐げられている存在がいる限りプリキュア達は戦いに出向く存在なのだと改めて認識した龍音は、武偵所から次元間で通信ができる見た目がスマホにしか見えない大気圏突破をしても壊れない次元端末をスイートプリキュアメンバーと奏太に渡したのであった。
「折角超神次元ゲイムギョウ界に来たのだから、一泊して行ったらどうかしら？」
「なんで紫さんが決めてるんだ？」
「でも」
「親御さんには、わたしから伝えておくから」
「いいじゃない」

「いいだろ。宿泊部屋は手配してやる。足りないモノがあるなら、これでそろえて来ればいい」
「ダメだよ‼　って行っちゃった、どうしよう？」
「素直に受け取ったらいいのよ。あなた達はこの世界にやってきたばかりで、「この世界の通貨を持っていない」のだから」
八雲紫の独断で超神次元ゲイムギョウ界に一泊することになってしまったスイートプリキュアメンバー達に龍音は立場を利用して宿泊する場所を確保ことと買い出しをするならとゲイムギョウ界の通貨くれであるｃｒｅｄｉｔで五万ｃｒｅｄｉｔをいつの間にか用意した封筒に入れて響達いるテーブルの上に置いて立ち去ってしまったのであった。
流石にお金を受け取る訳にはいかないと追いかけて行ったが足が速い響でも追いつけなかったらしくもう既に龍音はどこかへ行ってしまったのであった。

前略、

八雲紫の独断によって急遽超神次元ゲイムギョウ界に一泊することになってしまったスイートプリキュアメンバーと奏太は教会の部屋に案内されたのであった。
「どうもありがとうございました」
「ねぇ、二人とも、紫さん、アスナのこと知ってるみたいだった」
「もしかして、アスナの正体を知っているんじゃ？」
「間違いでしょ、あの凛としたアスナが言い負かされていたのよ」
宿泊することになってしまったスイートプリキュアメンバーの内中学生組の三人はなぜか龍音が使っている部屋の隣の和室に案内されて、中央のテーブルに集まって、八雲紫がアスナの事を全てお見通しだったことに響が気づいていたのだが、前もノイズとの最終決戦の際も自分達と龍音しか知らない曲をバイオリンで演奏して見せたのを見た響はアスナと龍音が重なっていたのであった。
その時は二人に龍音は男だと説得されて、追いかけるのを辞めたのだが、どうも響は引っかかっていたのである。
そこに、転機が訪れるとは知る由もなかったのであった。

「コンコン」
「誰だろう？」
「一緒に～逝かない？」
「響‼　奏‼　エレン‼　行くわよ‼」
「待って‼」
「この双子、見た目は兎も角性格が真反対なのね（，ω，）？」
「エレン、置いてくよ‼」
「待ちなさい‼」
　ドアをノックされたので響がドアを開けると、ハロウィンイベントで知り合った双子の姫奈太と志澄琥が一緒に超神次元ゲイムギョウ界のプラネテューヌの街に行かないかと誘いに来たのであった。
　二人とも響達が一泊することになったことを知っていてもあってもいられなくなったようで、二人も超神次元ゲイムギョウ界のプラネテューヌのプラネテューヌ教会で一泊することにしたのであった。
　実は四つ子なのだが、その事をすっかり忘れてしまっているエレンは姫奈太と志澄琥が見た目は似ているが性格が真逆なのだと分析していたら、響に呼ばれて慌てて向かったのであった。

「この世界が、龍音が暮らしてる世界なの？」
「違うわよ‼　龍音は「地球」で暮らしてるのよ‼」
「もう、響ったら、龍音から一言も「この世界で住んでる」って言ってた？」
「そういえば」
　と言った感じで姫奈太と志澄琥の案内の超神次元ゲイムギョウ界のプラネテューヌの街で龍音からもらったお金で必要な物は買いそろえられたのであった。
「この際だから、龍音呼んじゃえ！」
「天龍ちゃんも・・・」
「大丈夫なのか？」
　折角なのだからと言う龍音達も呼び出すことになってのであった。
　数時間後
「いいよ、今日はこっちで泊まって行くよ。お姉ちゃんの部屋もあるから」
「そういえば、龍音って、四年間何してたなんか、わたし達は何も知らない」
「いずれ話すよ、それじゃあ、ボクはお風呂入って来るからね」
「ねぇ、奏、エレン、ちょっといいかな？」
「まさか、覗きに行くんじゃないわよね？」
「そうと決まれば」

「響姉ちゃんが・・・・」
「そ・う・た、アンタも行くって言うなら（ ^ ω^ ）」
「行くわけねえだろ‼」
龍音と天龍達が合流して一緒に夜を明かすことになったのであった。
四年ぶりに再会した親友に血の繋がらない姉が多くなっていたことに驚いたのは言うまでもなく、龍音は風呂に入って来るといって部屋から出て行ったのを見届けた響はまたよかならぬことを思いついたようで「旅は道連れ世は情け」と言わんばかりに、奏とエレンを巻き込んで風呂場に向かって行ったのであった。
これが衝撃の事実を知るとは知る由もなかったのであった。

龍音に遭遇

龍音がお風呂に入って来ると言ったので響を含む中学生組は元プラネテューヌ教会の大浴場前にやってきたのであった。

「そこで何やってるの？」

響＆奏＆エレン「（ギクッ（。Д。）ノ!!）」

「もう、一緒にお風呂入りたいなら、そう言ってよ」

「ちょっと!!　いや、それは不味いって!!」

武偵であり感が鋭い龍音にはとっくに感づかれていたようで、大浴場の扉前でこれからお風呂に入るために入浴セットを持った龍音に遭遇してしまい、響＆奏＆エレンは冷や汗をナイアガラの滝のように流しており、必死に言い訳を考えていたのだが、龍音が少し間が抜けているのか鳴流神家の血筋らしく、大胆に一緒にお風呂に入らないかと、間違ってもレイヴン（リタ談）には言ってはいけないことをサラッと言ってしまったので響＆奏＆エレンは思いもよらない龍音の爆弾発言（笑）に驚いて慌てふためいていたのであった。

龍音は三人の慌てふためいている様子を気にすることなく、そのまま大浴場の脱衣所

へ向かって行ったのであった。
念のため言っておくが、今いる元プラネテューヌ教会大浴場の脱衣所は男性と女性と別れているため安心なのである。
「良かった、脱衣所が別で、あんなお姉ちゃんが居て、龍音は幸せだよね」
「当たり前でしょ、そうね、如何にもできるって感じのおねえさんだったわね」
「龍姫さんもそうだったけど、真龍姫さんも捨てがたいわね。脱衣所が別個じゃなかったら、入らないわよ　ん？」
「どうかした、エレン？」
結局、響＆奏＆エレンは脱衣所に設けられている壁掛けの電話を使い自分達の着替えを龍音の義姉の龍舞と姫龍紗が響＆奏＆エレンの着替えをなぜか気に入ったのか龍舞はノリノリにロングスカートのヴィクトリアタイプのメイド服を着こなしながら持ってきてくれたので、御礼を言って受け取って脱衣所で準備をしながら話をしていたのであった。
三人とも八方美人な姉達に囲まれて暮らしている龍音に憧れと羨ましいと言ったことを述べているのだが、龍音と真龍姫達が出会うきっかけが今のスイートプリキュアメンバーが受け入れられるのか知る由もなかったのだから。
そんな中、元が黒猫の為か何かに気が付いたのであった。

「龍音の歌声、迷いがないていうより、誰かを」
「普通に鼻歌を歌ってるだけでしょ‼」
　とエレンは先に大浴場の室内の檜風呂に入っている龍音の鼻歌まじりの歌声に魅了されたようで、響＆奏は呆れながらも大浴場に向かったのであった。

これまでの

超神次元ゲイムギョウ界のプラネテューヌ教会に設けられた檜風呂と露天風呂で構成された男女別だが、一応混浴風呂もなぜか設けられている大浴場に響＆奏＆エレン入ってきたのであった。

「うわ～（。Д。）ノ!!」

「広いわね（＞＿＜）」

「初めてだわ、こんなお風呂が大きい場所」

「エレンはまだ修学旅行に行ってないもんね（#^・^#）!!」

「って言ってるそばから!!」

超神次元ゲイムギョウ界のプラネテューヌ教会に設けられた地球のスーパー銭湯並みにジャグジーにサウナなどもあるのでメジャーランドにはない光景にエレンは音吉の本には載っていない知識に物珍しそうにしていたが、響は相変わらず掛け湯をせずに檜風呂に入って行ったのであった。

それを見た奏は注意して、エレンに大浴場で行う作法を教えながら檜風呂を満喫するのであった。

「さっき、天龍達から聞いたんだけど、「この世界」には全部で四つの国があるんだって」
「たしか、黒の大地「ラステイション」白の大地「ルウィー」緑の大地「リーンボックス」そして今いる紫の大地「プラネテューヌ」の四つ」
「行ってみたいわね、龍琥達の家はルウィーなんだって、龍華さんがわたし達より一個の上の中学三年生でラステイションに家があるんだって」
「それにしても、龍音達は「この世界」ゲイムギョウ界のこと詳しいんだろ、考えられるのは」

檜風呂の大浴場を堪能している響＆奏＆エレンはこれまでの事を振り返りながら会話をしていたのであった。

突然、プリキュアと呼ばれる「伝説の戦士」に覚醒し先輩のプリキュア達と交流をしながら闘いの日々を送っていたところに、偶然に四年ぶりに文武両道を絵に描いた親友、鳴流神家末妹、鳴流神龍音、龍音の幼馴染みにして、獅子神家末妹、獅子神天龍との再会に驚きながらも、経緯は違うが同じく共に戦うが先ほど死ぬほどつらい過去と罪を背負うと決めた少女、姫河小雪ことスノーホワイト改めキュアスノーとの出会い、そして、原典が存在するが「プリキュア」と同じく戦う戦士「仮面ライダー」として戦う天夏達と出会い、自分達を助けてくれる謎の黒紫の龍の仮面剣士の出会いになぜ龍音し

か知らない曲を容易くバイオリンで弾いたあの時から響＆奏＆エレンの周りは平和な時間が流れていたが、それも突然の目がある亀裂に吸い込まれた先には見知らぬ土地と生物の異世界にやってきたが、龍琥曰く、幻想郷でないだけましだと言われて、超神次元ゲイムギョウ界に飛ばした張本人である八雲紫と出会い、今に至るのであった。

龍音の性別

響&奏&エレンは現在「スキマ妖怪」の八雲紫の勧めで颯太とアコと一緒に超神次元ゲイムギョウ界に一泊することになったので、龍音が所属している武偵所本部が存在するプラネテューヌの教会に設けられた露天風呂&室内檜風呂など地球で言うならばスーパー銭湯並みの入浴施設を堪能しているのであった。

「ねぇ、響、大きくなったんじゃない？」

「そうかな？　エレンだって」

「そうかしら？」

やっぱり三人はお互いの肉体の変化を見比べていたのであった。

響&奏&エレンの三人の中で一番肉体が成長していたのはやはり響だったらしく、その次にエレンらしいのだが、奏は少し落ち込んでいたのであった。

「（＾＾♪」

「あれ？　龍音の鼻歌が」

「壁を隔てて聞こえてるんだよ」

「そうね」

しばらくしてまた龍音が鼻歌を口ずさんでいたのだが、元が猫であるエレンが最初に気づいたようで、三人とも壁の向こう側の男湯から聞こえて来る物ばかりだと思っていたのであった。

それが、響&奏&エレンの思い違いであり、響と奏が四年間の思い込みが崩れ去るのはそう時間がかからなかったのだ。

「なんだ、響達、入ってたんだ」

響&奏&エレン「え・・・・」

噂をすれば影が差すと言うのはこの事かと龍音の声が背後から聞こえてきたのでまるでホラー映画張りに響&奏&エレンは後方に振り向くと、そこに居たのは、

「龍音・・・なんだよね」

「もしかして・・・」

「・・・・まさか」

「なんだ～響達って、「ボク」のこと「男」だと思ってたの（＞＿＜）正真正銘のれっきとした響達と同じ「女」だよ」

響&奏&エレン「ウソ（ヨ）～ドンドコドーン（そんなこと）Σ（。Д。）」

「なんで、暗いの（。・。）？」

大和撫子と言わんばかりの艶やかな麗しい腰まで伸びたロングヘアーの黒髪にはち

切れんばかりの豊満な胸をこれまでもかと見せつけている龍音がそこにいたのであった。

響&奏&エレンはずっと龍音が男だと思っていたようで、特に四年ぶりに再会した響と奏は恥ずかしさの余り顔を赤くして両手を床につけて落胆していたのであった。

エレンは声も出なかったのであった。

そこに、

「アンタ達なに・・・えぇぇっぇぇぇ（。Д。）ノ」

「姫様（。Д。）ノ!!」

「いつまで続くの（^・ω・^）？」

アコもやってきたのだが、アコも龍音が女であることに驚いて大声で叫んでしまったのであった。

龍音に至っては相変わらずのマイペースで天然なのかいつまで驚かれるのであろうかと思っていたのであった。

ガールズトーク

四年ぶりに再会した親友「鳴流神龍音」が「大和撫子」または「絶世の美女」または「高嶺の花」がよく似合う「乙漢女」と書いて「おんな」と呼ぶのが相応しいく異性同性からもその恵まれた体躯には響達も釘付けになるほどだが当の本人が自覚がない上のと元の性格が大らかな楽天的で天然な部分を持っているすらっと伸びた長い手足の女の子だったことにスイートプリキュアメンバーは絶句していたのであった。

もちろん

「もみもみ（☆V☆）!!」

「響!!　やめなさい!!　アコの前で!!」

「やわらかい（＞＿＜）!!」

「ちょっと!!　響!!」

「同い年なのよね（。・。）!!?」

「アンタ、本当に中学生（。д。）ノ?」

奏がツッコミに回っているが手に負えないと言った感じであり、アコとエレンは本当に龍音が中学生なのか思ってしまったのであった。

これに関しては龍音も自身の正体を明かすわけにはいかず響に真ん丸お月様のような胸を鷲掴みにされたまま考えていたのであった。
姉が姉なら妹もかなりの「もの」を持っていても不思議ではないのだ。
流石に龍音も仮面侍にして客員神姫もとい次元武偵で「アスナ」だととても口が裂けても言えなかったのであった。
というより状況が言えるはずがないのだから。
こんな状況でも龍音は楽しめる性格の持ち主なので余計たちが悪いのが目に見えている奏は大浴場を楽しんでいたのであった。
そんなこんなで大浴場から脱衣所で髪をドライヤーで乾かしている間に響が鼻血を出しながら目を輝かせて龍音に近付くというと騒動があったが楽しい大浴場での時間を満喫した一行であった。
「まさか、龍音が女の子だったなんて」
「オレもちょうど和真兄ちゃん達と男湯に入ってたからな、龍音「兄ちゃん」じゃなくて「姐ちゃん」だったなんて驚いたぜ」
「驚くことなの？」
響達「勿論!!」
「いや、そんなに断言しなくても・・・」

どうやら男湯に奏太達も大浴場を満喫していたらしく龍音が女だという事実に奏太も驚いていたのであった。

事前に和真達に聞いていたとは言え、改めて龍音が女だという衝撃に呆気にとられていたのであった。

スイートプリキュアメンバーは口を揃えて龍音に断言したのであった。

「龍音って料理も出来るのね」

「それがどうしたの？」

「わたし、料理うまく作れないから龍音達みたいな手の込んだ料理なんて到底できそうにないよ‼」

「簡単な料理からすればいいじゃないかな？」

大浴場を満喫した一行は夕飯を自分達で作ることにしたのだがやはり経験が豊富な龍音達が手際よく料理を完成していったのに対し、響達は悪戦苦闘していたのであった。

本来ならば、コンパが作りに来てくれるのだが、どうやら気を利かせてくれたらしく龍音達が料理を作ることになったということだった。

献立に採用したのは、龍音の得意料理である和食系にしたのであった。

全員「いただきます‼」

「美味しい（＞＿＜）‼」
「響は相変わらずね」
「うまいぜ‼　姉ちゃんよりうまいぜ」
「そ・う・た・・・（。Д。）ノ‼」
「本当の事じゃない」
　どうやら、龍音達の料理は好評だったらしいが奏太は姉である奏と龍音の料理の腕を見比べて龍音には敵わないと評価して奏は怒っていたが、アコに肯定されてしまい、大人しくなったのであった。
　エレンは世間に疎いのか黙々と食べていたのであった。
「そんじゃな」
「姉ちゃん、龍音姉ちゃん達襲うなよ‼」
「襲わない‼」
　就寝するために各自宿泊部屋に移動したのであった。
「龍音ってやっぱり和真のお嫁さんなんだね」
「それがどうしたの？」
「否定しないのね」
「今更、隠す必要がないから」

女性陣は龍音の部屋に集まっており年頃の女の子同士の恋愛話に発展したが、婚約者がいる龍音は聞くだけに徹していたのであった。

エレンは龍音と神崎和真の甘い仲に何を妄想したのか鼻血を出していたのであった。

「やっと解放された」

『響達はどう思うと思います？　お嬢様が「神姫」ということに』

「それは響達次第かな、お休み」

『そうですね。お休みなさいませ』

龍音は響達から解放されて超神次元ゲイムギョウ界に一泊することになったので仕事で寝泊まりに使っているプラネテューヌ教会の自分の部屋で寝間着に着替えて久しぶりの部屋で寝ることにしたのだが、まだチョーカー型に仕立て直したインテリジェントデバイス「玄武」から自分が人間としての時間が残り少なくいずれ女神と化する肉体なのだということを親友である響＆奏＆エレンに明かしていないことを指摘されたが龍音はどんな結果が来ようと受け入れる覚悟は当に出来ていたのだからと言い布団に潜って就寝したのであった。

そして、翌朝

「ん～なんか重い～って!!」

「（―　―）ＺＺＺ」

「龍音、おはよ・・・」
「もう‼　なんでボクの布団で寝てるの（。・。）‼」
「ごめんなさい（／・ω・）／‼」
龍音はいつもと同じ時間に起きたのだが、なんと響＆奏＆エレン＆アコが自分の布団でパジャマ姿で寝ていたのだ。
響に至っては龍音の胸に顔を埋めて爆睡しているという有様だったのであった。

響く七色へ

突如スキマ妖怪こと八雲紫の鶴の一声で始まった超神次元ゲイムギョウ界に一泊することになった響達スイートプリキュアメンバーは龍音の部屋で寝ているという惨事を起していただった。

しばらくして、朝食

「いただきます～美味しい（＞＿＜）」

「良かった、美味しいって言ってもらって」

「すいません、なんかご夫婦の時間を邪魔しているみたいで」

「まだ、結婚してないんだ、落ち着いたら「籍」入れるつもりなんだ」

「すいません!!」

龍音の実姉の龍美と恋人である神城瑠美奈共に龍美が作ってくれた創作料理の朝食を食べていたのであった。

あの騒動は八雲紫の命名で「龍音抱き枕事件」と幻想郷で号外が出されたのは言うまでもなかった。

響達は龍美と瑠美奈が夫婦に見えたらしく、申し訳なさそうにしていたのだが、龍美

から、まだ結婚はしていないと答えたので、響達はまた申し訳ないと言った感じになったのであった。
「ごちそうさまでした!!」
「また、遊びに来なよ」
「八雲さんの力がないと来れないニャ」
「これ渡しておくね」
「これは?」
「次元転移が可能になるデバイスだよ」
「え、良いんですか（。Д。）ノ!?」
「久しぶりに出会ったんだから」
「ありがとうございます。龍音、いや「アスナ」またね「メイル」も」
「うん、響ったら気が付いたんだ」
　朝食を食べ終えた一行は加音町に戻っておりちょうど街の住民がで歩いている時間帯だった。
　そのまま、加音町で響達といっしょに行けばいいのだが龍音達も都合があるので、響も縁がある丘で別れることにして、別れ際に龍音は響達にスマホ型の色違いの「次元転送デバイス」を人数分渡したのであった。

そして、響達は加音町へ帰って行ったのだが、龍音と天龍に向かって仕事上で名乗っている「アスナ」と「メイル」と呼んで行ってしまったのであった。

龍音は自身が女であるということを知ったのだから気が付いて当然だと思って、龍音達も加音町を後にしたのであった。

「さてと、次に会う「プリキュア」はどんな子達なんだろう?」

「もしかすると、また顔見知りだったりね、お姉ちゃん達も別の街で友達がプリキュアだったしね」

「ゆりさんのこと?　お姉ちゃん達のおかげでゆりさんのお父さんは助かったけど」

「罪は数えたらしいからね。ボク達に手を貸すっていう条件付きで家族の元へ帰って行ったって」

「龍音!!　ちょうど良かったわ!!」

「どうしたの?お母さん?」

「ライブメタルのモデル「A」がどっかに転移しちゃったの（。Д。）ノ!!　場所が「七色ヶ丘町」なのよ!!」

「もしかして、「星空みゆき」の引っ越し先だよね」

「ええ、行ってほしいの!!」

「わかった!!　行くよ!!　天龍!!　和真!!」

「そうなるよな‼」
「行くんですか？　では、お供します龍音・・・いや「アスナさん」」
「なんかプリキュアぽいけど、行こう‼　いざ　七色ヶ丘へ」
　拠点の戦艦である「フラクシナス」に戻ってきた龍音達はスイートプリキュアメンバーのことを思い返していたり、姉達からハートキャッチプリキュアメンバーのことも教えてもらったことなどを振り返っていたのだが、そこに母、剣心がやって来て、真顔で美龍飛達が適合しているライブメタルシリーズの内、まだ適合者が居なかったモデル「A」が保管していたカプセルから転移してしまったというのだ、その場所がなんと、去年まで一緒に遊んでいた親友「星空みゆき」一家の引っ越し先の「七色ヶ丘」と言うのだ。
　龍音はまた親友が「プリキュア」だと知って笑みを浮かべながら仲間達と一緒に七色ヶ丘へ転送ルームから転移したのであった。
　今度は、どんな物語がまた、動き出したに過ぎなかったのだから